緋弾とニートと愚昧な武偵

札守

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾とニートと愚昧な武偵

【Ｎコード】
Ｎ６３０３Ｗ

【作者名】
札守

【あらすじ】
ありそうでなかったコラボレーション、二種類の探偵が織り成す生死の物語、死者の代弁者「ニート探偵」、犯罪と戦う「武装探偵」その間に立つ少年、藤島鳴海、彼は武偵となることで何を得る？何を守る？
※この作品はネタバレだらけです。原作重視の作品なので過度な期待をしないでください
作者は初心者です悪い所はバンバン出してください参考にします

プロローグ（motoive）（前書き）

どうも、いろいろ貪り食うように小説をみている札守と申します
何分初なので温かく見守ってください

プロローグ（motoive）

僕、藤島鳴海は１６歳の冬、実にいろいろな人と出会った。

ボクサー、ヒモ、軍人、探偵、ヤクザとどれも違った種類のニートだった、いや、まだ紹介せざるえない人たちが居る。

双剣双銃、訳ありの落ちこぼれ、大和撫子、ゴスロリ娘、麒麟児と一癖も二癖もある人物たちだ

「ナルミ、君はどうして武偵になりたいんだい？」

「今は・・・言えないよ、アリス、けど！・・・・」

黒髪碧眼の少女、ニート探偵アリスは僕が言い訳にしかならない動機を遮るようにこう言い放った

「なら、君をニート探偵助手から解任する。」

僕は東京に来て僅か二ヶ月あまりで更に転校した、アリスに話そうとした理由は後々に、さて、その転校先について話そう。

「東京武偵高校」

ある刑事ドラマ映画の舞台になったレインボーブリッジの南にある南北２０００メートル、東西２００メートルの人口浮島の上にある武偵を育成する総合教育機関だ

武偵と言うのは凶悪化する犯罪に対抗し、新設された国家資格で、武偵免許を持つ者は武装許可され、逮捕権を有するなど警察に準じた活動ができる。

ただ警察と違うのは金で動くこと、武偵法の許す範囲ならどんな荒っぽい仕事でも下らない事でもこなす。つまりは『便利屋』だ。

僕がここに転入する気になった理由は先ず、アリスと共に挑んだ最初の事件から話さなければいけない

エンジェルフィックスというドラッグがこの東京で蔓延したことがあった、それで犠牲になった友達がいた。

結果論になるがその子は死なずにすんだ、けど、それまでの記憶が無くなってしまった。

事件は僕が体を張って取りあえず解決したけど、そこで改めて僕、藤島鳴海の弱さを知った。

そして僕は一つのドットとして意味を得たいと思った。

プロローグ（motoive）（後書き）

いかがでしたか、コイツダメだろみたいなダメだしＯＫしています
のでご助言お願いします

人物紹介（ｍｅｍｂｅｒｓ）（前書き）

どうも、クロス作品初心者の札守です
今回はですね神様のメモ帳？なんだそれという方がいましたらこちらを読んでください。わかりにくい場合お答えしますので今回もお付き合いよろしくお願いします。

人物紹介（ｍｅｍｂｅｒｓ）

藤島鳴海（ふじしまなるみ）

神様のメモ帳の主人公、１６歳、男　外見は茶色っぽい髪に鳶色の瞳の個性のない顔

本作の主人公、戦闘力、技術力共に平凡以下だが観察力に懸けては目を見張る物がある（マージャン牌を散ばした際、その全ての配置を秒単位で憶える程）

また、どうしようもないお人よしで事件に首を突っ込んでは痛い思いをしても解決に辿り着く度胸を持っている

武偵としてのランクはＥより下のＦランクと勝手にアリスに言われているだけだがこれには別の意味がある、落ちこぼれであるが頭に血が上ったときなどは勘のみで事件の真相を推理する頭の回転の速さを持ち大きなイベントなどを統率させるのも巧い、専攻は探偵科（インケスタ）

使用武器は違法改造及び濫用性を考慮された、デザートイーグル、通称、少佐エディションと電圧強化された、スタンナックルである。

アリス

神様のメモ帳のヒロイン　本名は紫苑寺有子（しおんじゅうこ）

　年齢は明かされていない、長い黒髪に碧い瞳、人形を思わせるような整った顔立ちの少女

自らを「死者の代弁者」と名乗る、ニート探偵という名の引きこもり、主人公の元雇い主。

その気になればどんな情報でもクラッキングで引き出すことができる、もし彼女が武偵なら引きこもりという条件抜きで考えると確実にＡランク以上の能力があると伺える。幼い見た目に反して頭を使った戦術において彼女に勝てる者はほとんどいないが生活能力はゼロである（そういったことでの依頼が武偵高に来るほど）

探偵業を生業とし、実際に報酬を貰っているのでニートではないが

自営業はニートの定義には反しないとするのが彼女の持論であり、またぬいぐるみを友人のように大切にしているなど女性らしい一面もある

路地裏にたむろするニートたち（後記に記載）を率いてニート探偵団なるものを結成している。

ひそかに藤島鳴海を頼りにしているが素直じゃない性格と今回の武偵高に転校で雇い主としての縁を切った。

テツ

ニート探偵団の荒事担当　本名は一宮哲郎（いちのみやてつろう）

元ボクサー志望の兄貴肌の青年、筋肉質の体に黒髪とガテン系の顔立ちである、ただし金にだらしがない人物。

とある事情でボクサーとしての夢を諦めてしまったがその実力はヤクザ相手にも引けを取らない。

主人公のトレーニング相手で元ボクサー志望のノウハウを実践によって叩き込む。

警察関係とコネがあるらしく、たびたび事件においてはそれで事件解決に役立てる。

ちなみにパチスロで日々の生計を立てているニート。

ヒロ

ニート探偵団諜報（女性限定）担当　本名は桑原宏明（くわばらひろあき）

ホスト風の顔立ちにブランド物のスーツと一見まともな外見であり、巧みな話術に人当たりの良いが、その実態は女性を誑かして生きているヒモである。しかし、友人を大切にする性格で主人公のことを親身になって考える、実はある女性に並々ならぬ好意を抱いているがやっていることがアレなので相手にしてもらえない。探偵団としての彼の役割は知り合った女性から電話を用いて聞きだす情報を提供している。

少佐
ニート探偵団技術方面担当　本名は向井均（むかいひとし）
　小学生並みの背丈だが一応大学生、それも都内でもレベルの高い大学に通っておりそれも首席で卒業できる秀才だが卒業する気は毛頭ないと豪語しているニート予備軍。主人公の転校に付き合って武偵大に転校するなど筋金入りのミリタリーマニアであり盗聴、盗撮、不法侵入、違法改造と限りなく黒に近いグレーなことを平気でやってのける、また銃器に関する技術、知識が豊富であり転入先でも好成績を出している模様。

四代目
ニート探偵団には属していないが主に人海戦術担当及び平坂組組長
　本名は雛村壮一郎（ひなむらそういちろう）
　白く染めた髪と狼を思わせる鋭い眼光が特徴の都心のストリートギャングを取り仕切る人物。
口は悪く、一見冷徹だが仲間思いで決断力があり気配りもでき頭も切れる、そしてかなりの心配性素直でなく人に弱みを見せることをせずに抱え込んでしまうとても良い人、ただ賭け事は非常に弱い。あることをきっかけに平坂組を設立することになった馴れ初めは本編にて
主人公のことは名前で呼ばずただ園芸部とぞんざいな物言いだがエンジェルフィックス事件解決以来信頼している。

人物紹介（ｍｅｍｂｅｒｓ）（後書き）

どうでしょうか？
コイツの設定おかしいなど指摘ありましたらご助言お願いします

第一話　始まりの銃撃（The　opening　in　shooting）

どうも、下手の横好きな駄文職人、札守です
今回から第一話、本編スタートです
きっと彼等ならこんな出会いをしていただろうというようなという
私の妄想の果てに書いてみました、今回もお付き合いよろしくお願いします

第一話　始まりの銃撃（The　opening　in　shooting）

一人の人間（ドット）に意味はない、他人を集めることのできる意味あるものでなければ他人（ドット）を集めて一つの　絵（おもいで）　を作ることができない、僕、藤島鳴海は自分がその資質を持っているとは思わない。

けど、エンジェルフィックス事件以来、僕は・・・・・・。

「「「「「「「兄貴！！、お疲れさんス！！」」」」」」」

武偵として、懐かれてはいけない人たちに懐かれました。

僕は極々普通な一般の高校生だった、武偵になった以上これは過去形であろう。わけあって、ストリートギャングの平坂組、組員にこの藤島鳴海は兄貴と呼ばれています。

「兄貴、武偵高までお供します。」

その野太い声に僕は振り向く、平坂組の代紋である蝶の刺繍の黒Ｔ－シャツを着た、平坂組一の屈強な男、通称　岩男（いわお）が僕に話しかけてきた、僕としてはただ、四代目から話があるといわれたから着たのだが、

「いや、いいですよわざわざ送って貰うのも悪いですよ」

やんわりと断りながら僕は平坂組をまとめている四代目、雛村壮一郎へと挨拶に行った。

四代目がいる事務所の部屋に入る

中にいたのは当然平坂組の組長こと四代目と何故ここにいるのかイマイチわからない少佐だった

「表の馬鹿共が騒いでたが、お前が原因か園芸部？」
白い髪に鋭い目つきの青年、彼こそがこの組の組長通称四代目だ、相変わらず名前では呼んでくれません。
　僕は目を少佐のほうにやる、この人は僕の知っている人のなかでは最も違法行為を繰り返してる、できれば僕はこの人に手錠は掛けたくないのだが何もやらかしてくれないことを祈るだけだが、

「藤島中将どうした、そんな手榴弾を自陣に投げ込まれたような顔をして？」

いや、その手に持っている物が原因なんですが、少佐が持っていたのはガムテープでぐるぐる巻きになった妙に歪な三角形の物だった。まぁもしかしなくても拳銃です、はい。
「しょ、少佐！なんてもんを持ってんですか！？」

フッフッフと不敵な笑みを見せ、聞いた事実に唖然とする、なんとこの人、武偵大に転化していたと言う、都内でもレベルの高い大学に通っていたにも関わらず、わざわざ馬鹿の巣窟である武偵大に行くこともないだろうに・・・。
　それ（けんじゅう）をゴミのように僕のほうに投げてきたもんだから思わず腰を引いて受け取ってしまう、ちょっと、アンタ暴発したらどうすんの？

「中将、武偵という戦場に駆けていく、貴君にこの向井均からの餞別をやろう」
　できれば永久に使いたくないです、と断りたいが武偵になった以上使わなくてはいけないだろうと半ばあきらめムードでガムテープを解いた、手元に残ったのは鏡のような銀色をあしらった拳銃とは思えない大きさの物だった

「それはかの有名なＩＭＩ社が誇る、世界最強弾薬を撃ちだせる向井特製デザートイーグルだ、まぁ撃ってもいいが腕の骨折くらいは覚悟してもらうが・・・・。」

前言撤回、絶対に使わないようにしよう。武偵としてドンパチやるたび腕折ってたんじゃ治療費がまずいことになる。

それもこの人が作ったものなら余計な仕様があるに決まっている、実は少佐は銃火器類（こういうもの）に関しての知識、技術は天才の域なので、僕は信頼しているが同時に軽蔑もしている。

「おい、園芸部。話がある面貸せ・・・」

僕達二人の危険な会話に介入してきたのはこの事務所の主、四代目は頭を押さえて呆れたような目で見ている、そんな目で見ないでくださいこっちも参ってるんです。

四代目は少佐を追い出し、事務所の部屋は僕と四代目の二人きりになった、正直気まずい、この人はしゃべってみれば良い人なのはわかっているのだが、如何せんこの人とは最初の事件以来顔を合わしていないので何を話そうか困っている。

「園芸部、アリスとなんかあったのか？」

そんな沈黙を破ったのは四代目だった、アリスとなんかあった？、あったというとあった、先日助手としての縁を切られたんだった。しかし、このことを言うべきだろうか？別に言っても問題なかろうが何となく言わないほうがいい気がする。

「何でも、ない、です・・・・。」

その態度を見て多少四代目は怪訝な顔をしたが、すぐまたいつもの顔をしてこう言い放った。

「話したくなきゃ話さなくても良い。俺から言うことは唯一つだ。園芸部、あいつを泣かすなよ」

???、何のことだがわからない、アリスが泣く？　あいつは僕のことはどうにも思ってないだろう。
どうしてそんなことになる？
ダメだ、何のことかわからない、でも取りあえず答えておこう、嘘でもいいから。

「わかりました、では失礼します・・・。」

僕は逃げるようにして事務所の部屋から出て行く、その質問の意味が解らなかったから、僕を引き止めることなく四代目は僕を部屋から出してくれた、なにか呆れているような目で見送りながら。

（今の時点で泣かせてるのを気づいていないのか、あいつは？）

７：００分頃のことだった、このときの僕は武偵という仕事がどれほど危険な職業なのかをこの一時間後に知ることとなる、とある二人の男女と出会うことで。

ところ変わってここは、東京武偵高等学校探偵科の男子寮
散らかった部屋に脱ぎ捨てた制服のある、普通の男子学生ではありがちなそんな部屋、いやソファーの傍らのテーブルにあるベレッタＭ９２Ｆと９ｍｍパラベラム弾が転がっている辺りは武偵高生ならではだろう。
７：００なっても眠りこけている黒髪のボサボサ頭の少年、名を

遠山キンジという、とある事情でこの少年は脱武偵願望を抱いているのだ、おっと、彼が起き出したのでここからは彼に任せよう。

季節は春、俺、遠山キンジは来年から普通校編入を考えていた、俺はこの武偵のような狂った奴らの巣窟から逃げたくて仕様がなかった、とにかく普通になりたかった。

「ピン、ポ～ン♪」

寮の玄関のインターホンが鳴る、いつものようにあの世話焼きが来たか、と俺は多少寝ぼけた頭で玄関の扉を開ける。

ガチャ

「おはよう！、キンちゃん」

黒い長髪に白いリボン、顔つきは清楚なお嬢さん、そして武偵高指定の防弾セーラー服を着た

俺の幼馴染の星伽白雪（ほとぎしらゆき）だ、あと白雪さん、高二にもなってちゃん付けはやめてください恥ずかしいです。

「その言い方はよせ、俺は遠山キンジだ　キンちゃんじゃない」

俺はちょっときつめな言葉によって静止を促す、こんなとこほかの連中に見られたら血祭りも良いとこだからな。

「でも私キンちゃんことを考えてたから　キンちゃんのことを見たらつい、は、また私、キンちゃんってご、ごめんねキンちゃ、ふぁ・・・」

ため息と共に俺は思う、こいつの中ではどうあっても俺のことは『キンちゃん』以外に呼ぶ気はないと、まぁ俺としては言われて嫌な気分じゃない、寧ろコイツのように何の気兼ねなく話してくれる存在が居て素直に嬉しいと思う、一年前の俺はそんな存在を求めていたからな取りあえず玄関では難だから白雪を部屋の中にあがらせ

る。

「で何しに来たんだよ？」

「あのね、昨日まで合宿で伊勢神宮に行ってたでしょ？、それでキンちゃんのお世話何にもできなかったから」

と白雪はもってきた風呂敷の封を解く、中は弁当箱のようだ。

「しなくていいって」と素っ気なく俺は答える、男子寮なのだから見つかったらいろいろ拙いからな。

顔をやや俯いた後に顔を上げると

「（ウルウル、）クスン・・・・」

（これ以上続きを言うのはやめよう、女泣かせにはなりたくない）

白雪は甲斐甲斐しくも俺の食事や洗濯物の面倒を見てくれる、嬉しいことには嬉しいのだが俺が抱えているあの体質が無ければもっと素直になれていただろう、忌々しいあの体質が無ければ・・・・な。

「キンちゃん、どうしたのお弁当、美味しくなかった？」

俺の浮かない顔を見て心配そうにテーブル越しに顔を寄せてくる白雪、とてもしおらしい顔と相まってセーラー服の胸元に大きな二つの物がチラリと見える。

ドクンッ！と俺の体の芯が熱くなる。

ヤ、ヤベェ、お、落ち着け　落ち着け、俺、相手は幼馴染だぞ！そんな目で見るんじゃねぇ！

「わかったから、白雪、そんなに近くに寄らなくてもいいからさ、

な？」

パァァァと顔が明るくなりそんなこんなで時計を見たら７：４０分、あと１８分後に武偵高行きへのバスが出る、今日も気が滅入るが武装の義務が武偵高の校則なので仕方なく準備をする。
制服の上着の内側にホルスターと拳銃、戸棚の引き出しからバタフライナイフを取り出し開閉動作を行いズボンのポケットに押し込む。

白雪にパソコンのメールを確認してから寮を出て行くと言って行かせ、俺も余裕と言っても二分ぐらい早く寮を出た、な～に、バスの停留所は寮のすぐ前だ遅れる訳が無い、とたかをくくった挙句。

ブロロロロ～

バスは行ってしまった、まぁいいだろう今日は始業式だけなのだから授業は無い、自転車でも使ってのんびり行こう、と俺は自転車に跨る。
この時俺、遠山キンジはこの７：５８分のバスに乗り遅れたことを一生後悔することになることを俺は気付けて居なかった、そして空から降ってきた女の子によって俺の平穏が音を立てて崩れ落ちていくこととなる。

自転車こぎ続け数分、俺の隣に妙な乗り物が併走してくるが、人は乗っておらず二輪で立って操縦する乗り物、確かセグウェイと言ったか？が近づいてくる。

『ソノチャリニハ　バクダンガ　シカケテアリヤガリマス』
ほほう、これは巷で大流行中のボーカロイドで合成した声か、って爆弾！？おいおい、悪戯にもほどがあるぞ

まさか「武偵殺し」か、いや奴はもう逮捕されたはずじゃ・・・。

『武偵殺し』その名の通り武偵ばかりを狙った殺人犯だ、主な殺害方法はターゲットを逃げられない状況におびき出し、最後は爆弾でドカン！といった狡猾かつ残忍な奴で犯人と思われる人物は逮捕されたと聞いている、武偵殺しとは俺にとっては因縁があった、俺の兄さん遠山金一がそいつに狙われたのだ。

だがそれは今は問題ではない、何故俺が今　狙われているかなのだ　俺はただのＥランク武偵、落ちこぼれだ　なんで狙われるんだ？　こぎながら理由を考えながらセグウェイから逃げるが

『ソレイジョウ　ゲンソク　シヤガルト　バクハツ　シ　ヤガリマス』

げ、これより速くかよ、なら誰かに助けを

『ケイタイデンワヲ　ツカイヤガッタリ　タスケヲ　モトメヤガルト　バクハツ　シ　ヤガリマス』

万事休す、ならどこか人気の無い所に行って自転車から飛び降りるしか、そんな考えを見透かされたかセグウェイのハンドル部分に搭載してあるＩＭＩ社　短機関銃ＵＺＩがその銃口を向けてきた

「文字通り死ぬまで走れか・・・・。」

俺は生涯、この日のことを忘れない、この不幸で奇妙な始まりを・・・。

鳴海ｓｉｄｅ

四代目からの話が終わり少佐から例のものの説明を軽く受けて、武

偵高に向かって自転車をこぐ、路地を抜け、橋を渡り、東京武偵高のある、人口浮島にたどり着くここまでの距離は思った以上に長かった。
地図を見ながら武偵高に続く最短ルートを検討し、わかった上でまたこぎ始めたそのとき目の前を自転車で猛スピードで駆け抜ける、武偵高の生徒と思しき人が目の前を通過した、ここまでなら遅刻寸前の生徒が急いで学校に走る、と言った事だろう。しかし神様のメモ帳にはこう書かれていたのだろう。
「今日ここに、二つの人生の分岐点（ターニングポイント）が示される」と
僕はその人の自転車に引っ付いていた機関銃を乗せた乗り物に物々しさを感じ取り、その人のあとを追いかけた。
「あの、大丈夫ですか！？」
僕はそう問いかける、その人はすごい形相で言い放つ
「来るな！このチャリには爆弾が仕掛けられている！！、お前も巻き込まれるぞ！！」
ば、爆弾？僕はそのとき、この武偵という仕事がどれだけ危険なことなのか正直後悔した、逃げたかった、でも
「ほっとくわけには行かないでしょう！！」
と僕は懐にしまっておいた拳銃を抜くけど、彼に引っ付いている二輪の機関銃の銃口が僕のほうを向き発砲される
ダダダダダダッ！！
僕は電柱の影や減速を駆使してこれを辛うじて避けるが、防弾制服でない前の高校の制服に銃弾がかすめ、ところどころに血が滲む、それでも何発か二輪に発砲するがさっぱり当たらない。
「クソッ、なんで当たらないんだ！？」
僕はとにかく目の前の状況を見過ごすことができなかった。
鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ
（なんだあいつは武偵高の制服でもないのになんで拳銃を持ってい

るんだ？それも俺を助けようとしている？）
だが、仮にセグウェイを破壊したとしてもどうやって離脱する？そんな思考をめぐらせて上を見上げると、
走っているビルの谷間から見えたのは屋上のフェンスの上にたつ桃色のツインテールの女の子だ。おいおい、新学期の日から投身自殺か？命、粗末にすんじゃね～よって冗談を言ったつもりだったのだが・・・・。
その子は飛び降りたのだ、なんの迷い無く、しかし急降下した所でバッ！とパラシュートが開くそして

「ちょっとアンタ達、さっさと頭下げなさい！！」

その子は降下しながら太ももに仕組まれたホルスターから拳銃を二丁抜き、俺を追っていたセグウェイに打ち込むパラシュートの不安定な体制で、一発も外さず
ダウッ！ダウッ！ダウッ！ダウッ！ダウッ！
ダウッ！
計6発撃ち込まれたセグウェイがバランスを失い横転し、その動きを止めるこれで撃たれる心配はなくなったがまだ爆弾を抱えている、この状況からどうやって脱出するか？

「この自転車には爆弾が付いてる！！、お前も巻き込まれるぞ！！」
俺ってバカだよなぁ、自分じゃどうしようもできないのに他人が出してくれた手を振り払う、しかしその子は気にすることなくパラシュートの手で持つ部分を足に引っ掛け空中で逆立ちの状態になる。
そして
「武偵憲章一条！『仲間を信じ、仲間を助けよ』だからアンタのことを助ける！いくわよ！」
俺は自転車の前まで降下した女の子と抱き合う形で自転車から離脱する、その数秒後乗り手を失った自転車は転がってとまったとたん

爆発した、これが奇しくも俺とは正反対な二人との危険な出会いだった。

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第一話　始まりの銃撃（The　opening　in　shooting）

いかがでしたでしょうか？
何分駆け出しのですので御見苦しい文でしたが
最後までお付き合いただき幸いです。
次回もよろしくお願いします。

第二話　二組の視点（Two pair of a viewpoint）

どうも今回もタイピングが遅い、札守です

今回もこの駄文にどうぞお付き合いください

第二話　二組の視点（Two pair of a viewpoint）

鳴海side

一体なんだったのだろうか、いきなり女の子が飛び降りてきて、あの二輪に追いかけられていた人を助けだした、僕はため息を吐く、やはりここでも役に立たないのかな？、僕はなんともいえない空虚感に苛まれていった。結局の所、エンジェルフィックス事件は僕、個人の力で解決した訳でもないし、あの子の辛いけれど大切な記憶を守ることすらできなかった、僕はその場で意識を意識を投げ出したくなったが、

「♪～♪～♪～♪」

ケータイが鳴ったのでそれもできない、件名をみてくだらない奴だったら即、切ろうとしたがそれもやめる、何故ならその着信音がコロラドブルドック、アリスからの電話だったからだ　僕はケータイを開け電話に出る。

「遅い！、ナルミ、電話はワンコールで出たまえ」

やっぱりあのちんまいあいつか、と呆れる、縁を切ったのに何でかけてくるのか？

「君の雇い主としての縁は切ったが、友人としての縁は切った覚えは無いよ」

！心、読まれた？　相変わらずニート見たいな暇人が技術を持つと厄介な物だ、てか何でかけてきたんだ？

「アリス、何でかけてきたんだ？」
まずは当たり前のことを聞く、彼女が僕に電話をかけてくるのは事件の無いときは大概ドクターペッパーの買出しかあるいは洗濯などの家事をしてくれのいずれかだ、しかし今回に限っては僕の予想は外れていた。

「ナルミ、怪我をしていないか？」

と

正直　意外だった、話に聞くと暇つぶしの一環に日本の人工衛星から奇妙な電波を傍受し、逆探した結果あの二輪の通信記録だったそうだ、あとは簡単　武偵高の周知メールをハッキングして閲覧、『登校中の一般高校の生徒と武偵高生徒が武偵殺しの模倣犯にセグウェイにて襲撃』いうので僕が巻き込まれたと知ったそうだ。

「全く、君に比べれば海底の汚泥にいるバクテリアのほうが危機管理能力が高そうだ、チンパンジーでさえ、蟻塚の穴に木の枝を突っ込む知恵があるのに君は自分の身を削らなければそれもできないとは愚昧にもほどがある」

相変わらず訳のわからない表現で自分の意見をぶつけてくる、でも　同時に変わりないようでよかったと僕は思う、助手の解任を言い渡されて以来、顔を会わしていなかったので気になっていたんだ、今も顔を会わせてるわけではないけど

「えっとごめん、アリスに心配かけて・・・」
今回についてはアリスに心配をかけた僕に非がある、だから素直に謝る　気にかけてくれたことは事実なのだからしかし
（ドタッ！ごろごろッ！）

電話の向こうでなにやら物音が聞こえたがなんだんだ？
鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アリスｓｉｄｅ

ぼくは顔を真っ赤にしながら愛用のベットから転がり落ち、ぼくの友であるモッガディートを抱きなおしながら反論する。

「き、君の心配なんか死者の代弁者たるぼくがするものか！！　全く、ナルミは僕の予想を斜め下にいく、君が死んだらその死体の処理を行う人間が気の毒なだけだ！！勘違いしないでくれたまえ」

ある程度言い返したら、ああ、またやってしまったと反省する、「心配した」って言えばいいのに何でこのたった七文字を伝えられない、これではナルミよりもぼくのほうが愚昧じゃないか。

「ア、アリス、あのどうしたの？」
それでも、こういう風に話を切らないで聞いてくれる友人がいてぼくは嬉しい、でも本人には言えないのがもどかしい、とても　でも

「むぅ、君に耳寄りな情報を教えてあげよう、先ほどの電波と同じ周波数の物が君の近くに七台あるようだ、それとくれぐれも近づかないように、いいね？」

「わかった、アリス　電話ありがとう、じゃあ学校があるから切るね」

電話先のナルミは言葉ではわかったといったようだが、ナルミぼくが君に騙されるほど間抜けではないよ　でも君の性分はぼくが

知っているはずなのだから、あえて言わない。

「では、頑張りたまえ　藤島武偵」

ぼくは電話を切った、ふっとぼくの目から一筋の雫が流れる。

「ナルミ、君は、本当に、愚昧、だね・・・。」

ぼくはただ　君が彩夏のようなことにならないでほしいだけなんだ、なのに君は何故そうなるかもしれない道を選ぶんだ?、答えてくれナルミ・・・・。

アリスｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鳴海ｓｉｄｅ

アリスからの電話が終わり、僕は自然にあの二人が吹っ飛ばされた方向に向かっていた　何かあったとしても自分では何一つ解決することができないのに、それでも向かっていった　結局の所、僕は甘かっただけだった。自分の勝手な自己解釈に過ぎなかっただけだ、何とかできるかも、こうなるかも　というシビアなものも前では何の意味をなさない、いうなれば『思い上がりだ』、でも僕はそんなでもいいからと

僕は少佐から貰った拳銃の弾を再装填する。

『それでも、やってみせる！！』

僕はただ勘だけを頼りに、取りあえず目の前の厄介事を片付けることにし、再び自転車をこぎ始めた。

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ

う、うん？、イテテテッ　痛み感じるってことは、俺は生きてるのか？　助かったけど　いっそのことあのまま死んでも良かったんじゃないか？　俺の人生と引き換えに武偵をやめることもできたのだからな。

と冗談は置いといて、ここ何処だ？

俺は痛む体に鞭打ち、今自分が置かれている状況に目を向ける、どうやら俺は何かの間に嵌ってしまったようだ少し身動きをすれば出られるぞと思い、身を捩るが、

ムニュとした感触が顔に触る、何かと思い目をしっかり開けるとあの女の子がいた　制服がはだけて下着が露出している．．．拙いだろこれは二重の意味で。

ドクッドクッと俺の中の血が滾る、頭をふるって冷静に保とうと別の方向に目を向ける

この時点でこの女の子の名前が初めてわかった。恥ずかしい話だが　女性が上半身につける下着　いわゆるブラにデカデカと「神埼・Ｈ・アリア」　どうやらこの子の名前のようだ、しかしこんな華奢な体躯の少女がさっき俺を助けたのがまだ信じがたい、神埼は見た目はまだせいぜい中学生だぞ　なのにあの射撃の腕はすごいもんだ。

って感心している場合じゃない、俺の今の状態は爆風で吹っ飛ばされた→吹っ飛ばされた先が体育倉庫の跳び箱の中→現在、神埼が俺の上に覆いかぶさっている状態＋制服が乱れている＝起きたら大変、即逃げよう。

だけど、ここはお約束って奴で・・・神埼が起きた・・・　俺　オ

ワタＯＴＬ。

「へっ、変態！！、最低！最低！最低！最低！最低！、この痴漢！！恩知らず！人でなし！！」

神埼は子供っぽい顔を紅潮させながらポカポカと俺を殴る、俺は痴漢じゃない、とはっきり言いたいが相手はこっちの弁明を聞いてくれない　が、何かに気付いて　さっと跳び箱の中に隠れるとすぐ何かの走行音が聞こえる、次の瞬間。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダッ！！

跳び箱に無数の銃弾が襲う、跳び箱の隙間から様子を見るとさっき俺を追い掛け回していたセグウェイが今度は数を増やして撃ってきた。この跳び箱は防弾性なので貫通はしないが重機が近くに通ったような振動が跳び箱に響く

神埼は太もものホルスターから二丁拳銃を抜いてセグウェイに向かって発砲する。

ダウッ！ダウッ！ダウッ！ダウッ！ダウッ！

どの銃弾もセグウェイに命中しているが　先ほどのように機能停止とまでは行かないしかし神埼の発砲途中に俺は理性が飛んだ、発砲中の神埼は気付かなかったようだが彼女の胸が俺の顔に当たっていた。

（こんなに小さくても女の子の胸ってこんなに柔らかいのか）

邪な感情を引金(トリガー)に心臓の鼓動とは別の強い別の鼓動が俺の体の芯に響く、血が熱い、何か別の物がムクムクと俺の中で大きくなる理性を失う前に俺は思う。

『もうなりたくないんだ、あの俺にはっ・・・！！』

そんな葛藤の間に、神埼が迎撃したセグウェイ達が学校の並木の外に移動していく

「・・・やったか？」

先ほどとは違い　俺は信じられないほど頭が冴える、またやってしまったと後悔の念に駆られるが今回については不可抗力と割り切ろう。

対する神埼は先の興奮気味な状態ではなく冷静に受け応えをしてくれた。

「一時的に追い払ったまでよ　あいつ等、並木のほうに逃げたみたい、またすぐしたらやってくるわ」

「強い子だ・・・それだけでも　上出来だよ」

俺は不敵に笑い、神埼を跳び箱から抱き上げる　彼女はキョトンとした顔で俺を見上げる。

「ご褒美だ、お姫様」

彼女は顔を真っ赤にして少しあわてる、そんな彼女を抱え　跳び箱から飛び出し、彼女を体育倉庫のセグウェイ達からの死角にある

マットの上に座らせる。

「姫はそのお席でごゆっくり、銃を振り回すのは俺だけでいいだろ？」と彼女の握っていた拳銃を太もものホルスターに戻す、その間にもセグウェイ達に搭載された短機関銃（サブマシンガン）が火を噴く

彼女は大きな瞳を更に大きく見開き、俺に向かって叫ぶ

「ア、アンタどうしたの、おかしくなっちゃたの！？、撃たれるわよ！！」

・・・やれやれ、ここは死角だってのに撃つだけ弾の無駄だ。

彼女は俺の身を案じて警告を投げかけるが、俺は聞く耳を持たない、何せ今の俺には撃たれる弾丸が視認できるほどだからな。

「アリアが撃たれるよりいいさ」

「だから！　何キャラ変えてるんのよ！！何するつもり！？」

彼女はまた俺に疑問を問いかけるが俺はこの一言で彼女を静かにさせるとしよう

『アリアを、守る！！』

俺はそういい残しセグウェイ達の前に歩み寄る、その一瞬、銃弾の雨が止み、再び七台の短機関銃が俺の頭にむかって発砲するのが見えた、俺は着弾前にさっとかわし、懐からベレッタを抜きセミオートからフルオートに切り替え　撃つ。

ババババババンッ！！

計七発の銃弾がまるで短機関銃の銃口に吸い込まれるように命中する・・・・。はずだった、がセグウェイの脇から一発の弾丸が短機関銃の銃身を貫いたのだ七台が全てを、機関銃を載せていたセグウェイが横倒しになり実質、機能停止になった。

（今の銃弾は一体何だったんだ？）

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第二話　二組の視点（Two pair of a viewpoint）

いかがでしたでしょうか？

アリアの口調、ヒスッたキンジの口調は私の文才ではこれが精一杯ですＯＴＬ

では次回もお付き合いよろしくお願いします

第三話　三点が繋がる（Ｌｅａｄ　ｔｈｒｅｅ　ｐｏｉｎｔ）（前書き）

どうも、深夜投稿が主な活動の夜行性札守です

今回は三人に接点ができました、こんな文章力ので構わない方は

どうぞこんかいもお付き合いください

第三話　三点が繋がる（Ｌｅａｄ　ｔｈｒｅｅ　ｐｏｉｎｔ）

鳴海ｓｉｄｅ

アリスからの連絡があった場所に自転車を漕いでいってみた僕はポケットになにやら違和感があったので弄ると一枚の紙が出てきた。

「向井均　作デザートイーグル簡易説明書」

正直に絶対見たくなかった物がポケットに仕込まれたいた、いつの間にこんな物が入っていたのかと呆れ半分、何が書いてある好奇心５％とその他諸々の理由で恐る恐る開いてみる。

機能？　デザートイーグルの安全装置任意廃棄によっての高威力射撃

デザートイーグルは世界最強威力弾薬であるカテゴリー　マグナムを扱える自動拳銃でありソレを安全に撃つための装置を片手操作で解除できるよう改造を施した　これによりマグナム本来の威力が発揮できるようになった。これで君も骨折王だ　なお、これを使用する際の責任は本人にあるため苦情は聞かん！

・・・・・相変わらず無責任極まりない改造するな、知らずに使っていたら腕折ってたと？　少佐らしい改造です。ハイ、次は・・・・・

機能？　可変型マガジンの採用

デザートイーグルには弱点がある、この銃は本来マグナム弾使用を念頭に開発された物、即ちそれ以外の弾丸は使用できない、しかし銃身と弾倉の改造により、これは現存する拳銃の弾薬ならば種類問わず使用可能となった。これで際限なく撃ちまくれ！

少佐にしてはいい改造・・・か？、これからの活動には役に立ちそうだ。
次は・・・・・

機能？　通信機能＆自爆機能
　軍人として最も危ういのは武器を奪われることである、そんなときは撃鉄の下にある突起を引っこ抜け！十秒経ったら爆発するようにしているぞ！あと、おまけ程度にインカム対応の通信機をつけておいた　正直　これはつまらなかったがな・・・・・。

前言撤回　なんて機能付けやがるんだ、通信機能つき一回限りの手榴弾かよ？、てかあのとき爆発するかもしれなかったのか

　相も変わらずこの人のやってることが法に引っかからないのが凄い、悪い意味で
そうこうしているうちに僕はかすかに銃撃音が聞こえたほうに目を向けるすると

　さっきの自転車の人があの二輪に近づいているではないか　拙い、撃たれるぞと警告しようとするが腕に掠った銃創が痛み出す、それに距離が二十mくらい離れている。下手すれば、またあの機関銃にやられるだろう

（なら！これしかないか？、痛いだろうなぁ腕が折れるの）と僕は少佐から貰った銃の安全装置（セーフティ）を解除する。手元が震える　あの人についていた二輪を追い払うために何発か発砲した腕が痺れだす。これの最高威力で撃ったらこの腕は暫く使い物にならないだろうな、と自嘲気味で構える。でも

『しないことで後悔したくない！！』

ズガァァァァァー―ンッ！！

軽い音ではなく地面に木霊するような低く大きな音が僕の腕から響いた、一瞬　放った銃弾が衝撃波を纏い遠目から撃ったので結果はどうかは知らなかったが　とにかく腕が痛かった僕はその場で膝を付いて悶絶するしかなかった・・・・・。　格好悪いよね僕って

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ

横から撃たれた弾丸の調査については諜報科（レザド）と探偵科（インケスタ）に任せるとして・・・・・・この威力は無いだろ、セグウェイのＵＺＩは七艇の着弾点全て、拳ひとつ分位の穴がポッカリあいていた。

・・・・人体に当たったら確実にミンチだなこりゃ　冗談じゃすまない危険な威力の銃弾に今の俺も戸惑いながらも神埼のほうに振り向いた。

彼女は少し唖然としたようだが、俺が振り向いたと同時にさっき俺達が入っていた跳び箱の中に引っ込んでしまった

「お、恩になんか着ないからね、あんなおもちゃあたしでもどうにかできた・・・これはホント！ホントにホント！」

彼女が先ほどから跳び箱から出てこずに話しかけているのは恐らくあの爆発でスカートのチャックがダメになってしまったのだろう、男子の制服はホルスターのベルトがサスペンダーにもなっているの

で、俺はさっと自分のベルトを渡す。

彼女はそれを受け取ると手早くつけてさっと跳び箱から飛び出す、

「アッ、アンタさっきあたしの服を脱がそうとしてたでしょ！？あれは強制猥褻！！、犯罪よッ！犯罪ッ！」

彼女は地団駄を踏みながら自分の見解を主張してくる、成程、なら年相応の対応をしよう

「アリア、冷静に考えよう、俺は高校二年だ　いくらなんでも年の離れた中学生の服を脱がせたりするわけ無いだろ？」

俺は彼女を制止しようと紳士的かつ冷静に対応する、だが彼女はピンクのツインテールを逆立てて威嚇の表情をする

「あたしは中学生じゃないッ！！」

彼女は犬歯を剥いて更に怒った表情をする、対応を間違えたか？

女性は実際よりも年を多く見られると怒ると聞いていたが・・・・。

「ごめんごめん、インターンで入ってきた小学生だったんだね、でも凄いねアリアちゃんは　小学生なのにあんな」

ブチッ！！

何か切れたような音がしたが彼女は肩をワナワナさせてキッと俺に赤紫色（カメリヤ）の吊り目を向けてくる

そして

「あ・た・しは！！　高二ダァァ！」

ダンッ！！ダウッ！

とさっきセグウェイを迎撃した銃を俺に向け、足元に発砲される

何がいけなかったんだ？俺は・・・・・・。

アリアｓｉｄｅ

（何？あいつ、拳銃一つでＵＺＩすべて破壊するなんて、でもあいつなら・・・もしかして・・・・）

→アリアは横から飛んできた弾丸に気付いていません。キンジが破壊したと思っています。

あいつがこっちを向いて来たんだけどあたしはとっさに跳び箱に引っ込んでしまう、今は助けたくれたけどあいつは強猥の現行犯よ！、警戒するに決まっているじゃない！！　文句ある！？

「お、恩になんか着ないからね、あんなおもちゃあたしでもどうにかできた・・・これはホント！ホントにホント！」

いえ、どうにもできなかったと思う、圧倒的に装弾数の違いであたしが前に出たら・・・蜂の巣だったわ。なのにあいつは撃たれる直前にかわして壊すなんて、あたしでもできるかどうか・・・・。

そういえば　あいつ、なんか雰囲気変わったじてんしゃに乗ってたときのあいつへタレぽかったのにいきなりあいつ何で？

あたしはあいつに文句を言いながらもあいつの見せた戦闘について考えてたが聞き捨てなら無い台詞を聞いた気がするので最大限威嚇の表情をして訂正を求める、誰が中学生ですって！？、ただでさえ身長やむ、胸にコンプレックスがあるのになんて屈辱なの！？、強

猥魔の癖にッ！！

そしたらあいつこともあろうに花も恥らう女子高生に、しょ、小学生ですって！？、もう許さない泣いても謝っても絶対に許さないからっ！！

アリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ

俺は何故怒ったのかわからない神崎の喧嘩の相手に何の因果かなってしまったｏｒｚ

もちろん抵抗はするヨ？死にたくないからね。彼女が拳銃で発砲してきたので逃げることはせず逆に懐に入り込んで彼女の腕を脇に挟み固定する、

ダンッ！！ダンッ！！、ガキン！！

彼女は反射的に拳銃の引き金を引いてしまうだが今の音で弾切れになったのはわかった・・・・あとはあれを奪えば詰んだな。

「フンッ！！」

彼女は弾切れになったのを気付き、太もものホルスターに銃を素早く収め　柔道で言う背負い投げの要領で俺を投げ飛ばす、この動きはバリツか？

バリツとは正式はバーリトゥードゥ（Ｖａｌｅ　Ｔｏｄｏ）ポルトガル語では『何でもあり』つまり日本語では総合格闘技、または徒手格闘のことで　打撃、投げ、関節技を用いた武偵活動をやる上

では必要な戦闘技術の一つだ、彼女は対格差を気にすることなく俺は体育倉庫から投げ飛ばされる、俺はでんぐり返しの要領で投げられたときの勢いを殺し、体制を整える。

「徒手格闘もできるのかい？」

俺は余裕のある態度で挑発気味に感心する　別に貶している訳ではないし、頭に血をのぼらせることができれば・・・・・『俺は負けない・・・』

「逃げられないわよ！！、あたしは犯人を逃がしたことは一度も無い！！」

彼女は自分の太ももの裏を弄って何かを取り出そうとしている、だが・・・・。

「アレレ？」

無いんだよねこれが、俺は彼女から取り上げた弾倉（マガジン）をポケットから出して見せる

「ああ！！、あたしのマガジン！！、返せ！！」

俺はそれをあさっての方向に投げて彼女の気をそらさせるが彼女は無用の長物になってしまった拳銃をもう一方にホルスターに戻して今度は背中から刃渡り大体５０ｃｍ程度の小太刀を二振りを取り出し切りかかって来る。俺はあえて、その動作中に驚いたフリをした単純すぎる罠に嵌める為にな・・・最もこの罠にかかるかだけど。

「この強猥男！！、神妙に・・・・！！　みゃう！！」

ステン！！ ∪(゜~゜)∩

彼女は新種のネコ科動物のような声を上げ、盛大にズッコケた・・・まさか、ここまで予想通りになるとは思わなかった、俺はあらかじめ彼女から取り上げた弾倉から銃弾を何発か抜き取り、弾倉をあさっての方向に投げて視線をそらした隙にその銃弾を地面にばら撒いておいた、結果　彼女はそれを踏んだ際、銃弾がベアリングの役割し、コケた、彼女は目を回しながら小太刀を杖のようにして起き上がろうとするが、またコケる。

よし！！逃げよう、俺は足をとられている彼女をほっておき、この場から離脱することにした。

「に、逃げるな～！！、卑怯者～！！、でっかい風穴空けてやるんだから～！！」

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アリアｓｉｄｅ

もう！！、今日はなんて日よ名前も知らない男に服を脱がされそうになるは、そいつにあたしがあしらわれるは、でもうウンザリ！！、・・・あたしはやっぱり欠陥品でしかないのかな・・・？、いつも一人でこれまで戦ってきたもちろん一人の犯罪者も逃したことはなかったでも、今日はじめて取り逃がした。

なんで、うまくいかないのよ？・・・・

ズザッ・・・・。

あたしは何か引きずるような音を聞いた、とっさに物陰に隠れて

様子を見る、またあの二輪だったら今度こそ、あたしはやられる！！、がどうやらあたしが警戒していた奴じゃないみたい、あれは・・・一般高校の生徒？
でも、念には念を入れて・・・行ってみるか
アリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鳴海ｓｉｄｅ

イテェ～、脱臼程度で済むかと思ったのに間接やっちゃったなこれは・・・・・・。
僕は自己責任の下でデザートイーグルを撃った訳なのだが、少しは安全面考慮してください少佐、情けなくなるくらい痛いです。僕は痛む腕を支えながら、近くに止めておいた自転車に手を掛ける、取りあえず学校に行かなくちゃ、初日から大遅刻は拙すぎる。

「動かないで！」
僕はその言葉に足を止める、振り返ってみるとあのとき自転車に乗ってた人を助けた、女の子だ、けど
彼女は銃を持って僕の眉間に当たるように突きつけてくる、成程、抵抗したら撃つか・・・。
「アンタ、何でこんな所にいるの？、一般高校の生徒はここには用が無いでしょ？」
どうやら一般高校の生徒に見られているらしい、当たり前かここの制服がまだ手元に無いからこれ着てるるんだからね、一応これを先に発行してもらってよかった、でなきゃ僕は牢屋行きだからね。
僕は彼女を刺激しないよう内側のポケットから手帳出す、その間

にも妙なことをすればすぐ撃てるように彼女は更に銃を突きつけるだが、中身を開いたらすぐに銃をを収めてくれた。

東京武偵高校

第二学年　探偵科（インケスタ）　藤島鳴海

「よろしく、小さな武偵さん」

僕はその場で意識を手放した。

「ちょ、アンタ、ねぇ！！・・・・・」

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

第三話　三点が繋がる（Ｌｅａｄ　ｔｈｒｅｅ　ｐｏｉｎｔ）（後書き）

いかがでしたでしょうか？

ここにきて引き出しが少なくなっている私ですが

よろしければ次回もよろしくお願いします

第四話　それぞれの心境　（Ｔｈｅｉｒ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ）（前書き）

どうも、毎度おなじみ駄文職人　札守です

今回はですね、自分でも書いていて意味わかめでした　ｏｒｚ

皆様の目の不浄になるやも知れませんが今回もお付き合いください

第四話　それぞれの心境　（Ｔｈｅｉｒ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ）

キンジｓｉｄｅ

もしも神様がいると仮定する、そして聞けるのなら俺は聞きたい『神様よ、俺を苛めて楽しいか？』

ヒステリア　サヴァン　シンドローム（Ｈｙｓｔｅｒｉａ　Ｓａｖａｎｔ　Ｓｙｎｄｒｏｍｅ）

通称『ヒステリアモード』と俺は呼んでいる、これは遠山家の祖であり、かつて東京が江戸と呼ばれていた時の名奉行　遠山金四郎（とおやまきんしろう）、俺の家が代々引き継いでいる遺伝形質だ。これが発動すると常人の３０倍ほどの反射神経や思考の鋭敏化などをさせてくれる、ここまでなら、良いこと尽くめなのだが欠点がある。

それはこれの発動条件が『性的興奮』である、雄という生き物は異性を守ろうとするとき子孫を残そうとする本能ために多かれ少なかれパワーアップする、ヒステリアモードはこれが異常に発達した物だ、初代遠山は人前で刺青を入れた肌を晒すことでこのモードになり映画やテレビでのあの名奉行ッぷりをしていたわけだ。

しかし、俺の場合は彼とは違い異性との接触が鍵なのだ、そして俺はやたらキザになり女の子の願いをほいほい聞いてしまう。これを中学のころバレて女子達に独善的な英雄扱いされていたのは口外禁止の黒歴史だ。

場面を元に戻そう、俺は例の事件のせいで大遅刻をしてしまったことを誰にも言わず、自分の新しい教室に向かい教室の引き戸を開

ける、

ガラッ・・・・

「すみません、事情があって遅れ・・・・・。」

ガラッ、パタン　↑（扉を閉めた音）

・・・・・・・朝からあんなことがあって・・・疲れているんだ、うん、そうに違いない！　よし！帰ろう！！

ガラッ

「あ、あの、遠山君？　ＨＭはもう始まってるんですが・・・どうしましたか？」

「アァ！？（ °Д °#）」

「ヒッ！、あの・・・・・　席についてください・・・・・・。」

つい、状況を飲み込めず脅すようなことを言って萎縮してしまった、この先生は俺の所属する探偵科（インケスタ）の教師　高天原（たかあまがはら）ゆとり先生　武偵高では珍しい、常識人でありその人柄とルックスで男女生徒問わず人気がある・・・・・・。　そんな先生にメンチ切ってしまった俺は・・・・。

（（（テメェ～、ゆとり先生、脅してんじゃね～よ（　°Д °）ゴルァ！！））））

視線による、銃撃を受けていた、いや　武偵高なのだからきっと比喩じゃすまないだろうな。ｏｒｚ

しかし、俺がもっと気にしたのは、教壇の上にいる、桃色の悪魔と今朝のあの生徒である。

（あいつと同じクラスかよ、はーぁ。）

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アリアｓｉｄｅ

あたしは、さっき会ったこいつ、藤島鳴海と一緒にいる、あいつは出血していた量が意外にも多かったのであたしはこいつと自転車の回収を武偵高に連絡した。あたしには治す技術が無いから・・・・。

すぐに救護科（アンビュラス）の連中が来たけれど・・・あたしは同行することにしたわ、曲がりなりにも何もしていない仲間に銃を向けて脅した形になってしまったから・・・・・。悪いとは思ってるわ、あいつ（キンジのこと）の件もあって頭に血が上ってたこともあるし。

こいつが救護科のベットに担ぎ込まれた、・・・・・ちょっといたずら気分で寝ているこいつを弄ってみる

プニ

まず頬をつねってみる、無防備な人を弄くるのは、・・・・正直楽しい・・・。

「・・・『小さな武偵さん』か・・・・　・・・小さいとか言うなっ・・・・・。」

あたしは少しつねる力を強くしてみる、さっきムカついた台詞があったから。

「ん?、んっ・・・・・・・・・」

起きたようなので、弄るのはやめよ、あたしは部屋を出て行く、けど

「あの、待ってください」

呼び止められたので、つい　足を止めてしまう、ホント、あいつといい　こいつといい　何なんだろ?

アリアｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鳴海ｓｉｄｅ

視界が暗い、あそこで倒れてしまったのか僕は?

・・・・痛い・・・・・・・・。当たり前か　掠ったとはいえ銃弾が体を抉ったんだから・・・・・。手の感覚が無い、撃ったのもがアレだからね、でも我ながら無茶をした、見ず知らずの転入先の生徒を助けようとしたり、お節介で当たるかどうかわからない弾をぶっ放したり・・・・。ホント、何やってるんだろ?・・・・・。

こんな打算的だから、アリスにも愛想、尽かされたんだな・・・・・。元々、彼女は愛想は悪いし、もしこんな風に寝ていたら、部屋・

・・・叩き出されるだろうな。　ん、顔に変な感覚があるけど、つねられてる？
僕は、一気に起きるとは行かずまず声を出して、顔をつねってるであろう人物に話しかけようとする

「あの、待ってください」

僕は目を開ける、痛みのせいか視界がまだぼやけるが起き上がって、その姿を見る・・・・・・　正直、見なければ良かった、視界に映りこんだのは、自転車に乗ったあの人を助け、さっき僕に銃を向けてきた子だ、何のことで銃を突きつけられたかは知らないから、動けない体のはずなのにベットの角に退避してしまう、もちろんそんなことがあっても先入観で物事を見てはいけないとは思ってるけどやはり怖い、

「・・・アンタ、生きてたの？、良かった、じゃあまたね」

彼女は「用は済んだでしょ」みたいな流れでさっさと病室から出て行く、

「あの、どうして君がここに？」

僕は聞かなくてもいいことを聞いてしまう、普通に考えればあのとき意識がなくなったとき、自分では動けなかったはずだ　なのにこの病院みたいな施設に自分がいるのは目の前の彼女が救急かなんかに連絡してくれたのだろう。

「アンタはあたしと会った時、気絶したの、あのままじゃ後味悪いでしょ？、だからあんたをここに連れてきた」

対する僕は彼女の簡潔な答えに多少ポカンとしながらも聞いている、それと同じくして彼女の容姿とかを思わず見入ってしまった、ピンク色のツインテール、小柄な体躯に自信のある口調、あのときは確かにビビッたけど、今はそうでもない・・・・・・。　そうか、似てるんだ　アリスに　だから面識は無いはずなのに普通に話しかけられるんだ。

「あの・・・さっきはゴメン、いきなり銃を向けたりして・・・・・・。」ペコリ（＿＿＊）

目の前の彼女は罰が悪そうな顔をして、さっきの口調とは違い今度はやけに静かになった。別に気にしてないわけでもないけど、何と言うか意外だ、こういうタイプはよく言えば「我がはっきりしている」悪く言えば「他人の迷惑を顧みない節がある」という先入観で見ていた。それなのに銃を突きつけたことを謝罪してきて正直面を食らってしまった。

「・・・アンタ、授業あるけど、どうするの？、ここで休んでる？」

「・・・いや、僕も行くよ、さすがに転入初日に休むのは気が引けるし・・・・。」

・・・僕自身も、意外なことを言ったと思う、僕は以前の高校ではたびたび、自主休講（サボったり）したり、そもそも、学校に行かないで事件の捜査をしていたり・・・・・・・・・・・・・・・。我がことながらここに来る以前にも『普通の高校生』じゃ無かったんだよな。と僕はベットに座った状態で起き上がろうとする、多少よろめいたけど何とか大丈夫なようだ。　利き手以外は・・・・・・・。

「そういえば、君の名前を聞いていなかったね、なんていうの？」

「・・・アリア、　神埼アリア、それじゃ　行きましょ、・・・・・・鳴海。」

これが、僕とアリアとの初めて交わした会話だった、それから僕は記していくこととなる、多分、神様のメモ帳に書かれている　ほんの少しの人たちとのいくつかの事柄を・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・

場面はすこし　進む　僕らは配属されたクラスに向かっていった、神崎さんは教務科（マスターズ）という科に行って僕たちの配属された教室を聞いてきてくれた、

・・・・えっ？　何故お前が行かなかったって？、・・・・・どうやら僕はいろんな意味で有名らしい、悪い意味が若干多いが・・・・・・。

配属クラスが神崎さんと同じらしく、僕は神崎さんに手を引かれる形で連れてってもらった、足はは大丈夫なんだけど、上半身は破れて血痕の付いている制服に、包帯をしている腕・・・・。まぁこうしてなければ、ぶっちゃけ　不審者だよね？

突然だが、転入生が転入初日にする仕事は何でしょうか？

1に自己紹介

2に質問攻め

では3番目は何でしょう？

「れ、恋愛なんか下らないっ！！、今後そういうことを言う奴は、風穴空けるわよ！！」

答、いきなりの騒ぎの収拾役、では無いと思います。　藤島鳴海

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・

物事が起こるきっかけには、大きく分けて二つあると思う、一つ「個人の見解の違い」　二つ「周知に対する誤解」であると思う、・・・・・・できれば今回だけは。

僕らは病棟から着いた教室で　ごく普通に自己紹介を終えた、神崎さんの自己紹介は良い掴みだったけど

僕の場合は

（藤島ってあの藤島か？）、（うそ、ホントならこわ～い）、（諜報（ザド）科の情報久々の当たりか？）

（でも、噂通りなら相当やるぞ、あいつ）

・・・・なんだか、明らかに自分には関係ない単語が飛び交っているようだ、特に怖いとかなんで？

「コホン、皆さん静かにしてくださ〜い、変な噂が飛び交っているようですが彼は立派な武偵ですよ〜」

変な空気にならないよう先生が制してくれようとするが、

ガラッ

と教室のドア特有の引き戸の音が響く、ここでようやく冒頭の彼が出てくることとなった。

僕の期待が桜の如く散っていく　不安の積もる初登校の日だった。

第四話　それぞれの心境　（Ｔｈｅｉｒ　ｆｅｅｌｉｎｇｓ）（後書き）

いかがでしたか？

来週は武偵ｓｉｄｅと誰かしら待っていてくれているニート探偵団ｓｉｄｅを織り交ぜていこうと思います。

それではまた次回もお付き合いよろしくお願いします

第五話　記憶のフラッシュバック　（Ｆｌａｓｈｂａｃｋ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ）

どうも、最近、タイプが遅くなっている、札守です

今回は少し遅れましたが

どうぞお時間があるなら読んでやってください

第五話　記憶のフラッシュバック　（Ｆｌａｓｈｂａｃｋ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ）

キンジｓｉｄｅ

ありえんだろ、何の因果だよ、訳わかんねぇよ。俺が何したってんだよ

→（主に痴漢まがいことだヨ、ｂｙ赤松中学

・・・・・・・チッ！！

俺がこんなにぼやくのには少なからず理由がある、専ら　今朝俺に絡んできた桃色の悪魔（アリア）のせいだが・・・・・　話は少しさかのぼる。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・

今年の春、転校生が来る噂は俺の元悪友たち（強襲科（アサルト））の連中から聞いていた　なんでも、そいつはどこぞの国の武偵局から転校してくる凄腕の武偵だそうだ。まっそれはどうでも良いが、もう一つ妙な噂が立っていた。

俺は直接事件に関わっていたわけではないので詳しい事情は知らないのだが、俺が一年のときの冬、ある新型の麻薬が出回っていたそうだ、結局の所　警察も俺たち武偵も事件の立件ができずにその事件は闇に葬られたという。

しかし、非公営のとある私立探偵団がその麻薬売買ルートの元締めをぶっ潰した・・・・・・と俺たちの間では噂されていた　そしてその中に一般高校の生徒が関わっていた・・・・・・といわれている。

真相はさておき、今朝の件の人物について話そう。

「先生、あたし、あいつの隣が良い」

ええっ！？ΣΣ（゜Д゜；）

新学期初日　あいつは俺のほうを指差し、わがままな注文を吐いている。その悪魔を助長するように、クラスの連中が騒ぎ立てる。

「良かったなぁ、キンジ、なんか知らんが　お前にも春が来たらしいぞＷＷ」

ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ！！　武藤！！

「先生！！　俺、くじで　キンジの隣の予定でしたけど転校生さんに譲りま～ス！」

余計なことをほざいている　こいつはの名は武藤剛気（むとうごうき）、車輌（ロジ）科の優等生で外見は兄貴風スポーツマンだがその実態は飛行機から原子力潜水艦まで乗り物と名の付くものなら何でも操縦できる乗り物オタク、がこうした余計な気を使うため異性及び俺は奴のことは好きにはなれない。

「あら～そう、じゃ、遠山君の隣は神崎さん、ってことで」

ゆとり先生！！　何勝手に決めてんの～？、俺の意思は関係なし？　アレですかさっき脅したことへのささやかな仕返しですか？

俺の声にならない抗議は周りの連中の騒ぎで掻き消され、目の前の悪魔は俺の前に歩いてきて

「さっきのこれ、返すわ」

と俺がかしてやったベルトを投げ返してきた。ここまでならスルーできる奴はできるだろう・・・・・・・・・・・だが

「リッコ、わかっちゃった!!わかっちゃった!!、これ、フラグバッキバキに建ってるよ!!」

・・・・・俺が甘かった・・・・　ここは天下の馬鹿高校、武偵高であったことを・・・・そして・・・・・こういうことに反応しまくる奴がこのクラスに居たことを・・・・・・。

ついでだから紹介すると今の発言者の名は　峰理子(みねりこ)本来なら御法度であるフリフリの改造制服に　軽くウェーブのかかったブロンドの髪の女子だ、そして・・・・・・・・

「キー君はベルトしていない、そのベルトをツインテールさんが持っていた、この謎はつまりッ!・・・・・・・・・・」

「キー君が彼女の前でベルトを取る、何かをしたってこと〜〜!!!!」

彼女は体をくねくねさせながらとんでも推理を暴露している。

・・・・わかる人はわかるだろう、そう、彼女はいわゆる『腐女子』。それも男×男の標準的な（世間的には標準的ではない、絶対に）恋愛作品の愛好者ではなくいわゆるR指定ゲーム（ギャルゲー）を

愛好する残念な人であるが。

「なるほど、つまり彼女と恋愛中と・・・・・・」

コラ!!、そこ!!、納得すんじゃねぇ・・・・・・。＼（。Д。）

周りが騒ぎ立てる中で冷静に勘違いをしているこの人物、不知火(しらぬいり)亮(よう)は人呼んで『武偵高の良心』何か気に入らないことがあれば銃の発砲を許可されている武偵高において彼ほどの人格者はいない、しかし、

容姿はイケメンといえるはずなのに何故か浮いた話が無いのが謎だ。・・・・・一部では魖魅魍魎(ホモ)の疑いがあるらしい・・・・・できれば信じたくない。

その間にもクラスの連中は騒ぎ立てる

「クソッ!!、何でこんな可愛い娘がキンジなんかと!!」

「お前地味だと思ってたのに、予想を裏切りやがって!!」

「女に興味なかったんじゃないの!?」

「・・・・・不潔・・・・・・。」

最後の方の奴出てこい!、普通ないほうが不潔だろう!?

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

周囲を黙らせるが如く教室中に硝煙の煙と共に４５ＡＣＰ弾が空を切る、その最中に。

「なァァァァにッ！！、やってンダァァァァ！！」

もう一人の転校生が教壇から駆け出して

ドコッ！！

・・・・・・包帯をしていないほうの腕で殴り飛ばしやがった、我を忘れて発砲しまくった神埼を・・・・・・。神埼は殴られた勢いで教室の後ろまで転がっていきピクピクと痙攣してから伏せってしまった。

・・・・・・やりすぎだろう、転校生。　今後は夜道は気をつけろよこれだぞ

ｙ＝ー（　゜д゜）・∵　ぱーんってな。

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

鳴海ｓｉｄｅ

僕は転入早々完全にアウェーだ、誰も気にする風はないのは今更なので、まず担任の先生に話しかけてみる。

「あの、先生?、僕がさっき言われたことって一体・・・・・・?」

先生は騒ぎ立てる生徒を制せず、僕の質問に答えてくれた。

「某暴力団最有力次期組長」

「世界を相手にできるハッカーの助手」

「東京一のタラシの弟子」

「武偵一過激派の友人」

・・・・・・・いや、まあ、心当たりありまくりの人物達を連想できるこの羅列は、一体何処から・・・・・・。

「あの、藤島君?・・・・・・エンジェルフィックス事件、知ってます・・・・・・よね?。」

!、　な、なんで知ってるんだ!?　メディアではそのことについては一切と言って良いほどそのことについてのニュースが流れなかったのに、どうして?

「うちの生徒がそのことについて勝手に調べていたんです、そこに君の名前があって・・・・・・」

　先生は伏せ目気味で申し訳なさそうに答える、先生が悪いんじゃない、だけど、思い出したくなかった、自分の無力さがあからさまになったから、もうそうならないようにここに居るって言うのに・・・・・・。人は自分でならいくらでも自分を罵倒できる、でもそれ

を改めて他人に言われると非常に頭にくる、けどここで行動を起こしたら完全に八つ当たりだ、けどその直後。

ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！ダンッ！！

銃声を聞いたとき反射的にあのときのことを思い出してしまった、あの子が一度死んでしまったときのことを誰かが傷つくかもしれないその状況を見て。

八つ当たりとは世間ではいかに理由があろうと通用するわけではないだろう、だから僕は実に都合の良い自己解釈でこれはあくまで『問題解決』ということにしよう、そして後でも良いから・・・・謝ろう。

「なァァァァにっ！！、やってンダァァァァ！！」

僕は半ば衝動的に殴ってしまった、何の正当性もないままなのに、僕はその場でいたたまれなくなり、教室から飛び出してしまった。

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ニートｓｉｄｅ

ズルッ　・・・　ズルッ　・・・　ズルッ　・・・

ここは　渋谷のとある雑居ビルのラーメン屋の裏手そこにラーメンをすする人が居る。

「しっかし、マスターのラーメンは不味いなぁ」

出してくれている物に悪態をつく体格の良い男、通称テツ、紫苑時有子、アリス率いる誰が呼んだか『ニート探偵団』の一員である。

「ほっほう・・・・私の店で、しかも、無賃で食ってる奴のセリフか～？」

ビクッ！！ と女性のドスの利いた、声が後ろから響く、テツは体をひくつかせながら、後ろに居るであろう声の主に恐る恐る振り向く。

「マ、マスター、いやこれはその、正直な感想を述べただけで・・・・・・」

「・・・・そうか・・・・・・・・なら・・・・・・・・・・ありがとよ！！」

バキッ！！

最後の言葉の直後に腰の入った拳がテツの頬に刺さる、テツは宙を舞う、とまでは行かず、ラーメンの丼を手放し店の裏手に転がっていった。

読者はこの女性のことを男より大きい大女と勘違いをしているといけないので紹介しよう。

彼を殴り飛ばしたこの女性、テツが居座っているラーメン屋のオーナー、通称、ミンさん、ポニテで結った黒髪に季節を感じさせない

年中タンクトップにさらしを巻き、厨房で使うズボンというもはやこの人の普段着ともなる、そして

「ボサッとしてるんなら、アリスに飯食うように言いな！！」

・・・・・おおよそ　ここに来る人たち（ニート）のお母さん代わりでもある。

「テテッ・・・・・・あいつの管理はナルミの仕事だろ、俺が行ってもしかたねぇよ」

「ナルミはもう、ここには、こないよ」

無機質、といわざる得ない声が雑居ビルの裏手に響いた、その声の主は・・・・・・・

「「アリス？」」

ただ淡々と彼女は起こった事実を告げていく、

彼が背負っている責任と罪悪感

罪悪感への罪滅ぼし

そして彼なりの選んだ答え

そして自分がどうしたか

　それを二人はただ何の感慨もなく聞くだけだ、なぜならここに着ている人物たちは決められた社会（ルール）が通用しない人物達ばかりだ、そ

してなんらかの過去を背負っている人物ばかりだ、でもだからこそ

「・・・・お前とナルミが決めたんだ　良いんじゃねぇの？」

「・・・・・ちびっ子の癖に辛気臭い顔すんな」

「マ、マスター！！、誰がちびっ子だって！？」

そんな話題の中心である彼はというと、どんな巡り会わせか、武偵高屋上でサボっていた・・・・・・・。

実に奇妙で、あの日、あの時、あの場所であの子と出会った時のことを思い出していた。

多くの人にはどうでも良くて、彼にとっては掛け替えのない、記憶を・・・・・・・・・・・・・・・。

第五話　記憶のフラッシュバック　（Flashback memories）

いかがでしたか？

最近　頭に文章のストックがあまりに貧弱気味なのですが

よろしかったら次回もよろしくお願いします

第六話　依頼来る　（Ｒｅｑｕｅｓｔ　ｃｏｍｅｓ）（前書き）

どうも、今回は分量が少なくなってしまった
筆不精？な札守です
頭のストックは実に少なくその少ない物を搾り出して書きました。
よろしければどうぞご覧ください

第六話　依頼来る　（Ｒｅｑｕｅｓｔ　ｃｏｍｅｓ）

ｓｉｄｅ？？？

ハァ、ハァ、ハァ

東京のとある、廃ビルが建ち並んだ道、そこでまるで何かに追いかけられるように息を荒げて走り続けているスーツ姿の男がいる。いや、彼は実際に追いかけられている。

「いたか！？」

「こっちにゃいねぇ！」

「クソ、あの野郎何処にいきやがった！」

チンピラ・・・・・とは言いにくいその筋の人間が誰かを探している、彼らが探しているのは、まさに今、逃げているのがスーツ姿の男だ、彼は物陰に隠れながら、スーツのポケットから携帯電話を手に取り、ある番号にＴＥｌする。

♪～～♪～～♪～～♪

「あ、お父さん？どうしたの？」

携帯電話から少女の声が男の耳に入る。どうやらこの男の、娘のようだ

「メオか？　金庫の番号知っているな？、アレをもって、今すぐ家から出るんだ！！」

男は詳しい説明をせずに一方的に用件を自分の娘に伝える。

「えっ？、ちょっと待って、お父さん？」

少女は事情を飲み込めず詳細の説明を求めてくる。

「いたぞ！！」

男達の野太い怒鳴り声が聞こえてくる、どうやら見つかったようだ。

そしてスーツ姿の男は再び走り出す前に電話に一言を伝える。

「お前のことは、きっと　天国の母さんが守ってくれる」

男はその一言を最後に電話を切ってしまった。

ｓｉｄｅ？？？　ｅｎｄ

鳴海ｓｉｄｅ

空に浮かぶ雲、それを見ながらのサボりはここに来る前も同じだった、こうして屋上の給水タンクの傍でこんな風にボーっとしていたとき・・・・・・・彩夏と会ったんだ・・・・・。

・・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・はじめは変わった奴と思っていた、　いや、クラスメイトに関わろうとはしなかった、僕が言うべきことではないんだが・・・・・・・・・彼女は当時の僕にとってはそんな程度の人間でしかなかった、初めはホント、鬱陶しいくらい僕みたいな人間と関わって、何が楽しいのだろうと頭を抱えて考え込んだことも間々あった・・・・・・・・・。けど

「考えてみると、みんな彩夏のおかげなんだよなぁ。」

彼女のおかげでいろんな人と知り合えた、でも・・・・・・・・・・。

「当人がいなくちゃ、意味ないよ」

ピンポンパンポ～ン♪

校内放送独特のあの音が校内に響く、多くの学生はこの音のあとでの自分の名を呼び出されたときは

「2年A組、藤島鳴海君、藤島鳴海君、教務科(マスターズ)、高天原の所に来てください」

・・・・・・なんというか、絶望する・・・・・・・・まぁ、暴力沙汰を行ったんだから呼び出しは当たり前か。

僕は重い腰を上げ　屋上から校内へ、そして職員室に歩みを進めることにした。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・

ところ変わって、ここは教務科(マスターズ)と呼ばれる職員室、何らかの処分は覚悟しているが・・・・・・・・・・・・ 生徒が拳銃持ってるってことは、当然、教師も持っているだろう、あまり刺激はしないほうが良いよね？

ガラッ

「失礼します」

多少、周りのほかの先生からの視線がジロリと向けられる、その視線に多少　僕は怯んだが、取りあえず後ろから撃たれずに先生の所まで行けた。

「あの、先生、その・・・・・・・ すみま「ありがとうございました」、えっ？」

僕はついポカンとなってしまった、なんで　お礼言われるの？、目下僕の頭を悩ませている高天原先生は椅子に腰掛けながら僕に頭を下げている。

「本来は教師が止めるべきなのに藤島君にさせてしまってすみませんでした」

先生は教室での柔和な声ではなく何か責任を負っているような神

妙な声で話しかけてくる。

僕は騒動の仲裁を意識的にしたわけではないし、半ば衝動的に殴り飛ばしてしまったから・・・・・・・。

「いえ、でも悪いのはやっぱり僕ですよ？　女の子殴っちゃったわけですし・・・・・・」

普通なら退学も覚悟しなければならない案件である、この行為に反省はしているが・・・・・・・・・・・・後悔はしていない、実際に止めなかったら・・・・・・ここから先は正直　想像したくない。撃つのも撃たれるのもガンシューティングゲームの中だけで構わない。だから・・・・・・・・・殴った。

「それと、呼び出したのはこのことだけではありません」

と暴力事件は軽く流された、武偵高（ここ）ではそういうことが日常茶飯事だからかな？、先生は書類の入ったファイルを僕に渡してくる、何だこれは？

「とある依頼人から君への直接の依頼（クエスト）らしいんです」

傍から見たら、ボーっとしていたように見えたらしい僕にその詳細について話してくれた。

ちなみに依頼（クエスト）とは武偵が主に受ける民間からの依頼状だ、ゲームのようにその依頼には難易度があって、　解決毎に報酬と一般高校における単位をもらえる、つまり、依頼（クエスト）を受けなければ、単位不足になって留年ということもありえるのだ・・・・・・・・・・・・他人事ではすまなさそうなので積極的に受けるようにしよう。

え～っと、内容は・・・・・・・・・　んんっ！？

僕は依頼書に思わず顔を覗き込んでしまった、まさか・・・・・・・・・・・・またあそこに戻れるとは思わなかったから。

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

アリスｓｉｄｅ

ところ変わって、ここは、渋谷のとある雑居ビルの３０８号室、扉にはこんな看板が掲げられている

ｈｔｔｐ：／／ｔ３．ｇｓｔａｔｉｃ．ｃｏｍ／ｉｍａｇｅｓ？ｑ＝ｔｂｎ：ＡＮｄ９ＧｃＴｈｍＸｙ３ｏｈ３ＪＱＦＷＺ４ｓＯＵ２６ｆ－ｙｚｑＪｄＸＭ９ｎｌｋｍ５ＡｂＬＴｙ８ｓｎｇｋａｍｚｗＣｎＶＯＪＴｌＺＩを参照（コピーして検索してね　ｂｙ作者）

その中に一人の少女がいる、名前は紫苑寺有子、通称アリス、彼女はこの部屋で私立探偵をしている、彼女は一歩もこの部屋から出ずに依頼された案件を片付ける、という現代における安楽椅子探偵だ

だが・・・・・・・・・。

ぐゥゥ～

・・・・・・・・・彼女は仕事については完璧にこなす完璧主義者だが、食生活という面では栄養学者に真っ向から喧嘩を売るように、炊事もせず、不思議飲料ドクターペッパーだけで生活をしている、だが彼女も一応人間なので腹は減る。

ピンポーン♪

３０８号室のインターホンが響く

「入りたまえ」

相変わらず彼女は偉そうな言い方で外にいる人物を部屋に入るよう促す、おおかた　マスターが食事を運んできてくれたんだろうと高をくくっていたからだ、この声を聞くまでは・・・・・・・・・。

「アリス～ゥ、トビラを、開けてくれよ～」

彼女はバッと後ろを振り返って部屋のトビラに小走りで近づく。

「・・・・・・ナルミ・・・・・・？」

アリスｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ニートｓｉｄｅ

今日も今日とて働く気がない面々にも一定の行動パターンがある。
ある人物は一玉１円～４円の銀玉に時には稼がせてもらい、時には大いに負けることを理解していない元スポーツマンや・・・・・・・・・。

「ねぇ！、キミ、キミ！！　ちょっとお茶でもしない？」

容姿を武器に女性を誑かし、貢がせている紳士（じょせいのてき）や

違法行為を繰り返し、しかし、そのほとんどが世間に露見されていない日本におけるテロリストの予備軍や

路地裏ではばを利かせてるような少年達を纏め上げ、任侠紛いのことをしている集団がいる。

ここまでの情報では彼らには何の共通点もない、と思えるだろう

しかし彼らは全て　とある中心点を囲む円のほんの一部にすぎない、中心点に決してくっつくこともなければ、決して離れることもないそんな人たちは何故かその中心点がいるところに集う、しかし、その円もとい縁には決定的に抜けた線がある。

そしてここに、その中の三人が珍しく真面目な話をしている。

「・・・・・なぁ少佐?、俺らがここまでやるのは野暮ってもんじゃないか?」

ガタイの良い男、テツは至極真っ当な意見を述べる。

「テツさんは・・・・・・あの二人がすれ違ったままで良いと?」

小学生サイズの現役武偵大生も間違ったことは言ってない、あの二人とはすなわち藤島鳴海とアリスのことだ。

「ん～　そうだな～　僕らは切欠を作るだけにしない?」

常に中立、とは聞こえが良いタラシのニート通称ヒロは妥協案を提示する。

結果、今度事件の解決を依頼されたら、彼を呼ぶ

ということに落ち着いたようだ。

そして、その日の昼頃その事件が起こった、一人の少女が彼らの集まる店の扉を叩いたことで

第六話　依頼来る　（Ｒｅｑｕｅｓｔ　ｃｏｍｅｓ）（後書き）

いかがでしたか？

来週の更新は学校の行事が重なり

もしかしたらできないかもです

再来週からはまたできる時間を見つけるので

よろしければ次回もよろしくお願いします。

第七話　少女と旅行鞄（A girl and travel bag）（前書

どうもお久しぶりの札守です

やっと第七話できました

二つの原作を読み返し、これがつながりそうな部分を構成し、

なんの学ぶことなどなかった無駄な修学旅行も終わったので

今回から再び定期更新になるよう頑張ります。

では今回もよろしくお願いします。

第七話　少女と旅行鞄（A girl and travel bag）

鳴海side

武偵とは凶悪犯罪に対抗し新設された国家資格だ、警察のように逮捕権を持つが、警察とは違い、金で動くのが特徴だ、つまり報酬が出るなら死と隣り合わせの危険なものから、実に下らないことでもこなすのが武偵だ。

僕は武偵として初めての依頼が担任の先生から通達されました、無論ご指名で依頼されたのですからしっかりこなそうと思っています。　しかし・・・・・・・・。

「オラァ!!、ナルミ!!、チンタラしてんな!!」

今、僕はニート集う、ラーメン屋『ラーメンはなまる』にてアルバイトの如く目下こき使われております。

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・

　どっちかというと僕は武偵は危険な仕事と思っている、今朝の爆弾事件といい、銃の乱射といい・・・・・・　勿論こんな風に普通の高校生がやるようなことをすることに不満ということはない、寧ろいきなり刃傷沙汰上等のような依頼は今はする気は毛頭ない、できればこれからも・・・・・・・・・。

　さて、今回の依頼（クエスト）の内容はについて話そう。

臨時業務員募集（東京武偵高所属、藤島鳴海）

場所、渋谷区　〇〇町、〇〇ー〇〇番地、ラーメン屋『ラーメンはなまる』

報酬、業務時間による

所得単位　０．１

で受けたからここにいるわけだが、店主であるミンさんは「何だそ

りゃ？　しらねぇぞ」とそんな依頼（クエスト）を送っていないというわけだ、本来なら帰って良いと思うが『昼時だ、手伝え』の一言のもと猫が首根っこを掴まれるように襟を持たれて手伝いをさせられることになってしまった、というわけだ。

ちなみに腕の銃創は治療の結果　治っているので、怪我人扱いされてはいない。

仕事は順調・・・・・・とはいかず、丼を扱っては落とし、ミンさんに叩き出される寸前のところで『アリスに食事を持っていけ』と丼を渡された・・・・・・・が　しかし。

これが非常に面倒なことになったのである、トレイに丼に入ったラーメンを二つならまだわかる。　でも

「頭に載せるはないでしょ、ミンさん」

おまけにこれは制限時間アリときたもんだ、だが、何とか落とさずに僕は、アリスのいる部屋、3階の8号室、ニート探偵事務所にたどり着いたのだった。

そして

「アリスゥ～トビラを、開けてくれよ～」

と前回につながるわけだ、しかし彼女は非情にも

「入りたまえ」

と扉の向こうから幼い少女の気だるげな声が返ってくる

「両手が使えないんだトレイ、二つ持ってるから」
「下に置けば良いじゃないか」
「ムリ、絶対落とす」
「なにを言ってるんだきみは。床にトレイをおろすなんて簡単なこともできないくらい不器用だとは思わなかった。」
どうやら僕の状態をはっきり言わなければわかってくれないようだ。ならば
「頭にも載ってるんだよ！！」
多少怒りを込めた、声にやがてドアが開き少女が顔を出した。足元まで伸びる黒蜜のような髪、強い光を宿す大粒の瞳、そして・・・・・・。
「・・・・・・・なんで・・・・・・・・・・・・・喪服？」
「・・・・・・・目の前にいるきみが幽霊か何かと思ったんでね」
・・・・・・・どうやら僕は彼女の中では死んだことになっていたようです、彼女は呆れた顔をして今の僕を見上げてくる、まぁ傍から見たら実に間抜けな光景であろうから無理もないが・・・・・・。
結果的にはこぼさず、もって来れた。　彼女は僕から受け取った食事を病院とかでよくある、ベットをまたぐように設置している机でラーメンを食べている、すると。
「ナルミ、気に病む必要はない、今からでも遅くはない、武偵から足を洗いたまえ」
なんというか、相変わらず勝手なことを言ってくれる、確かに・・・・・・・・・気にしていないと言えば・・・・・・・・・嘘だ　僕は

目の前にいる少女のように清も濁も受け入れられる、そんな心は持ち合わせていない、だからどちらかに染まるしかできない、物言わぬ案山子（いっぽんじん）にもどるか、訳解らずの案山子（ロボット）になるか。
彼女は喪服でラーメンをすすりながら一言つぶやく

「・・・・・・・奇跡というのは誰にでも一度おきる、それが誰にも気付かれない形であろうと」
「え？」
「きみが曲がりなりにも武偵となれたこと、武偵として今日生きた状態で再会したこと、機関銃の銃撃を避けられたこと、全て奇跡、奇跡、奇跡さ　一日にこれだけの奇跡が起きたんだ、だからナルミ、希望を捨てるんじゃない、彼夏もきっと戻ってくる。」

これは・・・・・・彼女なりの気遣いだろうか、でもそんな淡い希望なんて信じることは僕にはできない。

彼夏は僕がアリスと共に挑んだ最初の事件、その事件の関係者であり・・・・・・・・被害者だ、彼女は僕が以前通っていた高校での初めての知り合いになった、彼女はその高校で一人ぼっちの部活動「園芸部」に属していた　彼女は熱心にその部活をしていた、でも、皮肉すぎることに彼女が育てていたのは・・・・・・・・・麻薬の原料だ　彼女は何も知らずに育てて、改めてその事実を知り、悲観し学校の屋上から身を投げた、誰にも何も言わずに・・・・・・・・・彼女は命は助かったものの、植物人間の状態に陥ってしまい、もうあれから四ヶ月にもなる、そこまでになると病院側も治療続行不可退院を余儀なくされるそうだ。

とほうけていた間にアリスはラーメンを食べきったようで伏せ目がちに僕の服の裾をクイクイッと引っ張ってくる、ああ、アレね僕は寄りかかっていた壁から離れ、彼女の求めるアレを玄関側にあるキ

チネットの冷蔵庫から取り出す。

カポッシュ

と彼女の所望したドクターペッパーの栓を開け彼女に手渡す、さっと僕の手から受け取り、のどを鳴らす　ある程度飲み終えたら、脳みそとろけてるんじゃないかって言うくらい良い顔を見せてくれる。

「・・・・・ナルミ、マスターからの伝言がある　『帰りも丼を頭に載せて降りてこい』だそうだ」

Ｏｈ！Ｎｏ！　ｏｒｚ　オニだ、ミンさんオニだよ

かくして僕は何とか追い出されずに『ラーメンはなまる』で報酬をもらえる裁断はついた　それから時間は暫く経ち業務を続けている中で、はなまるにある人物が訪ねてきた。

「サワディ」

と聞いたことのない言葉で　はなまるの引き戸を開けて　旅行鞄を肩にかけたその子は挨拶？をしてきた、年は僕と同じくらいか一つ二つ下くらいの健康そうな褐色の肌に春先にはすこし薄手な青いシャツと短いジーンズ（デニムか？）を履いた女の子だ。
ｈｔｔｐｓ：／／ｂｌｏｇｓ．ｅｍｏｒｙ．ｅｄｕ／ａｎｉｍｅｃ／ｆｉｌｅｓ／２０１１／０７／ｋａｍｉｍｅｍｏ－０２－０４．ｊｐｇ　こんな見た目ですｂｙ作者

彼女は少し戸惑った表情で店の中を見ている、当たり前か何故なら此処　『ラーメンはなまる』はただのラーメン屋にあらず、ラーメンよりも美味しいアイスクリームが売りの店なのだ　そして今、

ミンさんと共にそれの仕込み中だそして　ここに入ってきた事情を知らない客はラーメン屋からいきなり甘い香りがするわけだ　したがって戸惑うのは自明の理だろう。

「あのすみません、ここ『ラーメンはなまる』ですか？　すみません漢字あんまり読めなくて、優しいお姉さんが店長だって聞いたので・・・・・・・・・」

オイオイ、漢字は一つも使ってないぞ

「優しいお姉さんのお店か・・・・・・・・・・・・・・・・・うん、多分ちがう店だと思うよ？」

ボカッ！！

とミンさんに後ろからグーで殴られた、・・・・・・こういうことするから言ったんだよ・・・・・・・・と言ったら今度は確実に半殺しにされるので黙っておこう。

「嘘　教えてんじゃねぇ、でなんのようだ？」

痛む頭を押さえている僕を無視して話を進める、少しは気遣ってください。

「あの　ここの上に探偵さんがいるって来たんですけど」

なるほど、アリスへの依頼者か、アリスが経営している？通称『ニート探偵事務所』の存在を知る人物はここを根城にしているニートたちと何の関係があるのだろうか？

「・・・そうか・・・・・・ナルミ、こいつをアリスんとこ、連れてけ」

ミンさんはここの客ではないので残念そうだ、僕は彼女をアリスの居城　３０８号室に案内することにしよう・・・・・・ん？、助手の解任を言い渡されたのに何で似たようなことやってるんだろう？、ま、いっか

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

ところ変わって、３０８号室、ニート探偵事務所の中、アリスはいつものくまのパジャマ姿のまま今回の依頼者と対峙する。

「きみが今回の依頼者か、ぼくはアリス、ニート探偵だ、こっちは友人のナル・・・・・わっ！！」

アリスは体をベットの奥のほうに後ずさる、なぜなら、はなまるに訪ねてきたこの少女がいきなり詰め寄り

「あの、抱っこして良いですか？」

とベットの上に乗ってきたからだ。

「な！・・・・・・・・・どうして女子供はぼくを見ると抱きついてこようとするんだ！！」

アリスはベットの上にあるぬいぐるみたちをバリケードのように積み上げながら拒否の言葉を浴びせている、「いや、その気持ち分からんでもないぞ？」と僕が言ったら余計にこじれそうなので黙るしかない。

「良いから、きみの依頼をいいたまえ」

この一言で彼女は神妙な顔つきになりこれまでの経緯を語りだした。

彼女の名前は「メオ」、アリスが言っていたタイのチューレンという魔物に連れ去られないように名乗るまじないによる、伏せ名なので本名は分からない、メオのお父さん、ハローコーポレーション勤務、草壁昌也（くさかべまさや）が金庫の中身をもって外へ出ろと伝え　メオはその言葉に従い、家を出た、それ以降の父親の所在は知らないそうだ
そして彼女の住んでいるハローパレスというハローコーポレーションが経営しているマンションでヒロさんがそこの住人のところでヒモをしているときに彼女に何か困ったことがあったら『ラーメンはなまる』に行くと良いよと紹介され、現在に至る。

そして今彼女が持っている旅行鞄を開く

「「「！！！！」」」

そこには福沢諭吉がプリントされている日本銀行券、通称一万円札がその旅行鞄からあふれんばかりに詰まっている。

「・・・・きみの家はこれほど財蓄できるほど裕福なのかい？」

「うち、そんなにお金持ちじゃないよ」

「てか、これ　もしかして会社の金じゃ・・・・・」

はっと僕は思わず口をふさいでしまう余計なことを言ってしまったと後悔に駆られるが

「お父さんは泥棒なんてしてないよッ！！！」

「落ち着きたまえ！！、メオ　今、ぼくらのやることは決まった、一つきみの父上の所在の検索、二つこの金の出所の調査だ、そしてきみがぼくに依頼しないならきみを警察に突き出す。」

メオは警察に行くのをひどく嫌う、彼女の父は元大阪系のヤクザだったそうで　万一警察に知られたらハローパレスの出稼ぎ労働の人たちまで迷惑をかけると終いには顔を抑えて泣き出しそうな声で訴え始めた

「・・・・あのさ、僕は何かできないかな？」

僕は自分自身で不思議だと思った、僕自身は能動的にこの事件に関わることはないと思っていたからだ。

アリスは目を少し見開いて、少し考え込む・・・・そして・・・・・

「・・・・どうせ、ぼくが止めてもきみは何かのために　これから

も身を削り続けるのだろうね、でも・・・・・・現状きみしかできないことを　ぼくは　きみ　藤島武偵に依頼(クエスト)として正式に依頼するよ、きみにぼくの依頼者(クライアント)、メオの護衛を頼む。」

「えっと、ふつつかものですが、よろしくお願いします。」

とメオは正座し、頭を下げてきた

あれ〜?、もしかして依頼(クエスト)のダブルブッキングになっちゃった?

第七話　少女と旅行鞄（A girl and travel bag）（後書

・・・・・まず謝っておきます、すみませんでした

二週間待たせてコレかよｗｗｗｗとなった方もいるでしょうが

これでも精一杯書きました。

さて今回から次回の予告的なものをさせていただきます

これで展開が読めてしまう方もいると思いますがご了承ください

次回予告

「鳴海です、アリスから依頼され　夕方頃先生に聞いていた寮の部屋に戻ったらて、ワ～～～！！！」

バキュン！！　バキュン！！バキュン！！バキュン！！

アリア「こんの！！、風穴～～！！」

キンジ「次回、護衛と稽古　簡単にいえば危険が満載だ、この駄作者を見捨てないで待っててくれ」

第八話　護衛と稽古（Escort and training）（前書き）

お久しぶりです、札守です。

前回の予告とは大いに違っていますが

それでも待っていてくれた方もそうでもない方も

第八話をどうぞよろしくお願いします。

第八話　護衛と稽古（Escort　and　training）

鳴海side

アリスから武偵らしい依頼（クエスト）を請け負い、今　ぼくの後ろにいる少女、メオを守ることになったけど、さてどうしたものか？

「武偵さん、どうしたの？」

当の彼女は全く危機感のない無垢な目で見てくるから尚更困る、護衛をするって言っても、やり方が分からないし、何より護衛は傍にいて匿（かくま）うってことでもあるからその場所も考えなければいけないよな？

♪～♪～♪～♪

電話が鳴った、見たことのない番号で少々不安になったが次の声で緊張の糸が切れてしまった同時に堪忍袋の緒が切れかかった。

「やぁ中将、武偵らしい依頼（クエスト）　調子はどうだ？」

ピッ

「武偵さん、何で電話切っちゃうの？」

「・・・・・間違い電話だったからね、気にしないで」

♪～♪～♪～♪

電話がダメならメールかよ、何のようだよ？　あの犯罪者予備軍

「中将へ
アリスから連絡を受けた、自分は中将のサポートに回るようにとのことだ
これからの予行演習と思ってこの護衛を取り組むように。
それと・・・・・・例のアレをやるぞ、遺書は持っておけ・・・・・・・
では健闘を祈る。
ps
護衛については教官に報告はしないこと、中将の口八丁で学生寮の鍵を受け取り次第
護衛の任務に当たれ、なに自分の名を出せば取り計らってくれるだろう
なお教官に自分の名を挙げて起きた問題に関しては当局は一切関知しないので
そのつもりで

このメールは最終文を読み終え、閉じた時点で自動的に削除される」

・・・・最後のセリフってアレかスパイ大作戦の局長のか？

それと・・・・転入早々何をやったら取り計らってくれるまでになるんだ？

・・・・・・考えるだけ無駄か、少佐だもの・・・・・・かといって当てがあるわけでもないから・・・・・・従うか。
それと、アレやるのか。はぁ、嫌だなぁ。

そんなわけで僕は教務科(マスターズ)へと歩を進めることにした。　このときの僕はこの判断がいかに安直な判断だったかその後日、思い知らされることになった。

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ

新学期が始まったその日の夕方、俺は今朝の事件を含め、生涯、この出会いを忘れることはないだろう。
それは一つの始まりと言えるのか、あるいは・・・・・・・・・・俺の覚悟の分岐点だったのか・・・・・・・・と。

俺は学校が終わって探偵科(インケスタ)の自室に戻っていた、帰る道中までがいろいろあったが　まぁ、その辺は察して割愛してくれ、さて、俺がいるこの部屋は元々、４人部屋なのだが俺以外、数がぴったりなのでここを一人で使っているんだが、まぁクラスメイトからネクラと呼ばれてる俺でもたまに人恋しくあることもあるんですよ、こういうときになるべくフツーの人と関わりたい・・・・・・まぁここが武偵高であるかぎりそれも叶わぬ願いだが、

「・・・・あ、開いた」　　ガチャ

ん、ガチャ？・・・・・・・・玄関のサムターンが回った？　ここに入居の生徒なんて聞いてないけど誰だ？

俺は寝そべっていたソファーから起き、玄関に向かう

「あ、あんたは今朝の」

　正直、思っても見なかった人物が目の前にいた、今朝の一般高校の制服とは違って武偵高のＴＮＫ（ツイスト・ナノ・ケブラー）製の防弾制服が真新しく、一瞬、新入生？と勘違いしてしまいそうになるが

「武偵さんの知り合い？」

　後ろから季節不相応な薄手の姿の女がヒョッコリ現れたので、思わず後ずさってしまう。

たかが十数年の人生経験の俺が言うのも難だが・・・・・・・・・

厄介事のにほいしかしねぇ～よ

ただただ俺は放心状態のままで彼らを家に入れた。

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・

「・・・・・・あの・・・・・・・・遠山キンジさん、ですよね」
女を連れた男子生徒が話しかけてきた、おいおい転入生？　あれですか「家出少女を拾ってきちゃいました　てへ」か？、だとしたら・・・・・・・・Ｏ☆Ｉ☆ＤＡ☆ＳＵ！！
必殺の意を込めて　ポケットのバタフライナイフと懐のベレッタに手を掛ける

「蘭豹先生から手紙を預かってきたんですが」
Σ（゜д゜lll）なに！？
俺は瞬時に土下座してしまった・・・・・・・・あの蘭豹から・・・・・・・だと、

蘭豹とは武偵高ＮＯ１の危険人物である、普段の授業から拳銃の使用を強制し（体育の授業で）生徒に無理な依頼（クエスト）を押し付け、断る者なら折檻、生徒同士の決闘を殺し合いにしろ！という壊れ具合である。
その性格は単純にして粗暴、すなわち暴力メスゴリラ的な存在である上、何しろめちゃくちゃ強いので誰も逆らえない。
そんな奴から手紙を預かってきた奴に危害を加えたら・・・・・・・・・比喩なしで死ぬ。
俺は若干ビビリ気味で手紙の封を空けた
・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

・・・・・・・・

結論をまず出そう

「彼ら二人と共同生活をしろ！？」

・・・・・・いや、まぁ、同じ男子の藤島だけなら分かるよ？　しかし何で女子と寝食ともにしなきゃいけないんだよ？　だけど断ったら・・・・・・・・考えたくない。となれば俺の選択肢は一つだ

「・・・・・・わかったよ、好きにしろ」

そんなこんなで寒々しかった一人っきりの４人部屋に一気に２人の同居人が増えることになったのだ。

そしてその日の夜のこと、夕食を共同で作ったり、風呂に入ったりする　武偵高の寮生なら当たり前のことをして寝室でいざ寝ようとした時のことだ。

「・・・・・聞きたいことがあるんですがいいですか？」

と藤島が語りかけてくる。

「・・・・・答えられることなら・・・・・・・・あとタメで良いぞ？」

俺自身も気になっていたからな、何故・・・・・危険な仕事のはずの武偵にわざわざ一般高校にいた、藤島がなったのかを聞きたいからな。

「じゃあ、キンジは何で武偵をしているの？」

いきなり答えにくい質問だ、思い出すのも色々と複雑で込み入ったことだからな・・・・・・・話すべきか否か。

「・・・・・・僕は多分逃げたくなかったんだと思う。」

「ん？」

なかなか答えない俺に自分が言わなければ話さないのか？と思ったらしい藤島が話してきた

「僕には他の人よりも大切な友達がいたんだ、その人は僕を変えてくれたと同時に・・・・・・・・いなくなってしまったんだ。」

いなくなったって、転校したとかか？　でもこのニュアンスは何だ？

「・・・・・キンジは去年の冬にある事件があったのを知ってる？」

「・・・・・詳しくは知らないが・・・・・」

「聞いていて気分の良い話じゃないんだけど、その友達はね、その

事件の最大の被害者なんだ・・・・・・・・」

それからの話は正直、信じられないような話ばかりが出てきた、エンジェルフィックス？　ニート探偵？　平坂組？　どれもこれもとても元一般高校の生徒の経験したものとは思えなかった　でもそれ故に彼は逃げずに立ち向かう道をとったのか。

・・・・・・正直、理解できない。人間は誰でも無責任なことを大人数で言って　その責任の擦り合いをして何時の間にかそれが有耶無耶になってる　そんな日常のほうがずっと楽で安全で平凡に暮らして行けるはずなのに・・・・・・・・・・・・わからない・・・・・。

「でも逃げたことには変わらないんだけどね」

！？　一瞬彼の言葉がわからなくなってしまった、いや彼がどんな思いで武偵になった理由を聞いていても俺にとっては納得のできるものではなかったが

「本当に逃げないのなら、その子のいた環境をできるだけ壊さず、信じて、待っていなければならないのに帰ってくるって希望を捨てて、ここにいるのだから」

「・・・・・帰ってくるって希望があるだけでマシじゃねぇか」

バッと布団を翻す音を聞く、気に障ったことを言ったつもりはないのだが・・・・・・・・・どうやら気に障ったらしい、仕方がない、こっちも話すか。

「俺は・・・・・・・・正義の味方になりたかった」

飛び出しては来なかった、大人しく話を聞くつもりなのだろう

さて、話そうか

「初めは憧れだけだった、子供じみた、そう、特撮のヒーローや本の中での英雄みたいな人物が身近にいて、その人が目標だった」

「ん～、たんてい、さんっ　ん～」

・・・・・リアルで寝言言う奴、始めて見たよ・・・・・・。

「・・・・・・この話はまた今度でいいか？　起こすの悪いし」

「・・・・・うん」

こうして夜は更け、俺達は眠りについた。

キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ

コケコッコ～！！な翌朝。

「・・・・・よし行くか」

まだ世間では新聞配達をしている人がいるか、いないか位の現在時刻、午前３：００

現在同居中の二人を置いて彼、藤島鳴海は寮を出て行く

「二人とも、逝ってきます」

あながち間違えじゃない言葉を残し、自転車に乗り、彼はいつも行っているラーメンはなまるの裏ではなく、渋谷のとある廃ビルの建ち並ぶ、少し道幅の広い所で自転車から降りて。

彼は息を吸い、気を落ち着かせ、通信機を内蔵した自らの拳銃に手を取り

「少佐、始めてください」

やがていつもの少佐とは思えない実に冷たい声で

「では、これより、戦闘訓練カリキュラム、狙撃手（スナイパー）ＶＳ拳銃手（サジェスト）をはじめる、制限時間は一時間、・・・・・・・・・・開始！！」

ズキューン！！

ちょうど運動会で使うピストルのような実弾の合図が春先とはいえまだ暗い空に鳴り響き、その瞬間に彼は走り出す。

もうお分かりだろうが、これはいわゆるサバイバルゲーム、ただし実弾での訓練だ

ルールはいたってシンプル

一時間以内に僕が少佐の潜む、ビルを見つけ出し射殺圏内に捉えること。

もしくは・・・・・・・・・・。

キュン！！

「あぶね！！」

少佐の放った弾に被弾するか・・・・・・のいずれかだ。

「中将、この弾丸は徹甲弾（ピアス）だ、防弾制服だとしても直撃すれば風穴が開くぞ、だから・・・・・・・避けろ！！」

ズキュン！！　ズキュン！！　ズキュン！！

彼の手に持つ、通信機から檄を飛ばす、徹甲弾とは対装甲用の銃弾、つまり対象物を撃ち抜く為、開発されたようは貫通力の高い弾だ・・・・・・・・・・ちなみに日本では禁止されている銃弾です。

何故少佐が持ってるかは察してやってください。

最も彼、藤島鳴海はこの訓練については懸命に取り組むつもりである。

もう二度と無力な案山子（いっぱんじん）には戻れなくてもいいと・・・・言葉が過ぎるかもしれないが、そう誓ったのだから、『武偵になる』と決めた、そのときからこの命は此処に在って無いようなものなのだから。

第八話　護衛と稽古（Escort　and　training）（後書き）

・・・・何の当てにもならない予告でしたね、すみません。

でも飽きずに

～次回予告～

「キンジだ、さて朝から学校も行かないルームメイトを叱りつけてやりたい衝動に駆られるのだが」

鳴海「何？（ギロッ）」

キンジ「・・・・視線と雰囲気だけで萎縮してしまう俺をチキンジとは呼ばないでくれ」

鳴海「次回　銃撃と拳撃」

キンジ「藤島、お前なんか、キャラ変わってないか？」

鳴海「答えは次回」

第九話　銃撃と拳撃（Shootings and fist attack）

どもども～久々の更新の札守です
いや～今年も終わりですね～
この作品は無駄にだらだら長い上に両作品とも未完結なので
完成するまでどれほどかかるんでしょうね～（，＿）ｙ－～～（
遠い目）

いや失敬　では第九話をどうぞ

第九話　銃撃と拳撃（Shootings　and　fist　attack）

鳴海side

ズキュン！！、ズキュン！！、ズキュン！！

東から太陽が昇り始めた、午前４：３０

いまだ銃声が鳴り止まないのは二人とも互い（ターゲット）に片をつけられないでいるからだ。

ハァ、ハァ、ハァ「ちょっと！！、少佐、殺す気ですか！？」

僕は物陰に隠れて、いまだ一発も発砲していない通信機つきのデザートイーグルに訴えかける。　しかし返答先は非情にも

「凶悪犯に対して、いちいち聞く質問ではないだろう。しゃべれるのなら殺る気で殺れ！！」

ズキュン！！、ズキュン！！

・・・・・

・・・

・・・

武偵という国家資格が新設された際、同時に武偵に適用される『武偵法』というのが制定された。

武偵の三倍刑、所持できる銃剣類の種類、武偵が請け負える依頼の制限など武偵活動に関するさまざまなことが書かれている。その中で武偵である以上絶対に守らなければならない、一条がある。

武偵法第9条「武偵は如何なる状況においても、その武偵活動中に人を殺害してはならない。」

たとえ正当防衛のためであろうとこれを破れば武偵の三倍刑により極刑を言い渡されたと同然の懲役数百年の刑に科せられることもあるのだ。

早い話が　少佐は僕を殺すつもりだ。

僕はぎりぎりまで建物の間になっている所から路上に近づき、顔を一瞬、路上に晒す、次の瞬間。

キュン！！

まさに目と鼻の先に銃弾が掠るのが・・・・・見えた！　すぐ顔を引っ込めて、今度は銃弾が飛んできたほうに視線を移す。

ズキュン！！

今度ははっきりと銃弾の発砲光が建物から見えた、聞こえた。

「反撃、してもいいよね？」

そう自分に言聞かし僕は拳銃の安全装置(セーフティ)を解除し靴紐を結びなおす。
僕は潜んでいる少佐が潜んでいるらしき建物にある程度検討をつけ、
今いる場所から最も近い建物の間へ

ダッ！！

走り出す。撃たれないように、昨日と同じく速く動いては少し歩幅を変えて、タイミングを外させる。

ズキュン！！、ズキュン！！

銃弾が地面に刺さって出る砂煙とわざと髄足になって砂煙を作って、僕の身を隠す。
そうしたことを何度か繰り返すうちに、

ズザァ

発砲光が見えた建物に滑り込むことができた。

僕は体についた砂を払いながらその建物の階段を静かに登る、一階、二階、三階、四階、ちょうどこの辺りだ、発砲光が見えたのは。

ここで読者の皆さんに質問だ、僕のいる四階のフロアの左手には二つの部屋がある、手前の部屋は扉がない部屋、その奥のは扉があって閉まっている部屋、この場合どちらの部屋に入るべきだろうか？

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・

はい、時間切れ、この場合は扉のあるほうだ、何故かって？　理由は罠は扉に仕掛けられることが多いからだ、その答えだと扉のないほうが正解だと思うかもしれないが、扉という仕切があるほうがその罠に対する準備ができるんだ。それに・・・・・・・・少佐が罠を仕掛けて無い訳がない。

僕は鞄に入れてきたガムテープを扉のない部屋に注意して扉のあるほうのドアノブに貼り付ける、

案の定、扉のないほうには無人の狙撃銃が稼動していた、ブラフでここに飛び込んだらその後ろから頭を狙うという腹積もりだったのだろう、そして・・・・・・・・・

クィ

とガムテープを引っ張ると

ドォン！！

扉には爆弾が仕掛けてある・・・・・・・・・と。

最後に・・・・・・・・・。

「少佐、何処にいるんですか？」

手に持った拳銃の通信機に話しかける

「・・・・・・何時頃、気付いた？」

「おかしいと思ったんですよ、そっちからは銃声の音が聞こえないのに実際は発砲されていたんですから、となれば何らかの手段で、狙撃に似たことを遠隔でしていたと考えたんです」

「しかし、それだけでは建物への突入の理由としては弱くないか？威力を抑えたとはいえ扉に爆弾まで仕掛けたんだぞ、それができるのなら建物の入り口に仕掛けることもできた、何故入った？」

確かに今の少佐なら容易にできることだけど・・・・・・・・・や

っぱり・・・・・・・・。

「信じていたんですよ、少佐は嘘をついて勝負にならないようなことはしない、それに人を傷つけるようなことをするわけないって」

「・・・・この建物の屋上だ、武装はしていない、全く中将は甘いというか何と言うか・・・・・・・・・・。」

「じゃあ今回は・・・・・・・・・？」

「中将の勝ちだ、だが中将、これからやる訓練カリキュラムはこの比ではないぞ、覚悟しておけ」

午前４：５０分、狙撃手と拳銃手の戦闘訓練はまずは僕の勝ちだった。

それからは少佐から「今回の勝ち星の褒美だ」と木箱に入れられた銃弾を５～６個ほど受け取った、本当に困ったときだけ使えといわれたけど、このＤ・Ａ・Ｌて何の略だろう？

それに加えて今度は近距離戦の訓練をやるからって黒いメリケンサックに籠手をつけたボクシンググローブみたいな物を渡された、話ではこれもスタンガンなのだそうだ秘匿性はほとんどゼロに近いと思うけど。

そんなこんなで僕は探偵科（インケスタ）の寮に帰っていった。

＊

「ただいま」

軽く欠伸しながら、寮の部屋に入る、世間では早起きであろう午前５：５０頃に僕は帰ってきた、不健康極まりないことに俗に朝帰りという形で・・・・・・・・・・。

トン、トン、トン、トン

包丁独特のこぎみの良い音を聞きながら、寮のリビングに入っていく

「あ、武偵さん、おはよう、朝帰り？、夜遊び？」

・・・・・取りあえずそのボキャブラリを吹き込んだであろう犯人（ヒロさん）を逮捕してこようかな、え～と、青少年健全育成法、違反かな？

それよりも。

「おはよう、メオ、朝、早いんだね、もう少しゆっくり寝てて良いんだよ？」

「メオ、花嫁修業中なの、これはその練習、お嫁さんがお寝坊良くない」

自立してるねぇ～、確かメオは僕より年下のはずなのに生活力あるよな～

「そういえば、メオは今、１４だっけ？、あと2年たてば親の同意で結婚できるんだよね？、相手いるの？」

「うん、お父さんと結婚するの！！」

・・・・・・は？、いや待て　確か三親等以内の近親婚は法律違反じゃなかったっけ？

「あのさ、メオ、お父さんと結婚は無理なんじゃないかな？」

「何で？、メオとお父さんは血はつながってないよ？　メオの本当のお父さん　メオが小さいときに死んじゃった、今のお父さん、メオのお母さんもメオも大好き！！　だから結婚する！！」

・・・・・血の絆よりも家族の絆・・・・・・・・・か。　正直、羨ましいよ　僕の家って家族であって他人のようなものだもんな

父さんは仕事の都合でほとんど家に帰らないし、姉さんは武偵になるっていっても「あ、そう　頑張って」の二つ返事でｏｋしたし、だから、

「メオ」

「何？武偵さん？」

だから、今、壊れていない家族の絆を・・・・・・

「お父さんは、必ず見つけるから、今は僕らの言うことを聞いてくれる？」

守ってあげたいと思うんだ。

「・・・・・うん、探偵さんも武偵さんもメオは信じてるから、お父さんを絶対見つけて」

＊

それから暫くのうち、キンジも起きて来て三人で朝ごはんを食べて、学校に行く時間になり、僕は依頼（クエスト）の続きではなまるに行くことになった。

玄関でキンジが「何で学校行かないのか」って聞いたけど、如何せん寝不足な上に護衛の詳細を教えることはできなくて多少イラついた僕は目をできるだけ鋭くして「だから何？」と凄んで言ったが意外にあっさり

「そうか、じゃあまた夕方な」

ガチャ

・・・・・素っ気なさ過ぎるけど　ま、いっか、じゃ仕事に行こう。

「メオ、留守番頼むよ、それと必要な物があるならメモして渡してくれる？」
「うん、いってらっしゃい　え～と・・・・・・・・・これで良いかな？探偵さんにもよろしくね」

このときの「よろしくね」という言葉に多少含みが在った様に思えた、そしてそれは嫌な予感だったことを今の僕はわからなかったのだ。

鳴海ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

キンジｓｉｄｅ

俺はあの二人が起こしてくれたおかげで久々に余裕を持って学校にこれて、藤島とメオについて考えている

なんだったんだあいつ、昨日と打って変わって人が変わったように機嫌が悪くて、昨夜のことが気に触ってたんかな？　いや　気にするだけ無駄か、聞いた話に寄れば・・・・・・・・・・・・・・・あいつはもう人の心じゃねぇ、さしずめ、機械というべきか、あいつのせいじゃないのに全部抱え込んで溜め込んで。
そんな中メオとか言う家出女子も　あの蘭豹の後光でまんまと転がり込まれたが・・・・・・・・どうもあの二人くさいな、こうなったら武偵らしい方法で

「テキトーにガス抜きと洗ってやるか」
「ガス抜きって何が？」

俺の隣にいきなり金髪フリフリ女子、理子が顔辺りに近づいてきて内心驚く

「なんでもない、それと理子　顔が近い、近い」
平静を装ってはいたが・・・・・・・・・・正直、危なかった　ここでヒスったらやばかった。
「え～！？　教えてよ！！　理子、キー君の欲しがる情報あげてもいいよぉ？」
「当然有料だろう？　それに教える義理はないぞ」
ピピピピピピピピと理子はケータイを取り出して、何かを打っている、
何してるんだ？
「おい、理子何してる？」
「キー君が教えてくれないから、とあるＳＮＳの良いオトコの人達に紹介してあげようと・・・・・・・。」
「教えさせていただくのでそれだけは勘弁してください」
新手の脅迫かよ？下手に紹介されたらアーッ！！　なことになるとこだったのか目の前の脅迫犯は何処吹く風？と悪びれる風もなく俺が話すのを待っている。
「しゃーねぇー、実はな・・・・・・・・・・・・。」
勿論、事実事態はぼかして教えた　しかし、このとき気付くべきだった、この話を盗み聞きしている人物が居たことに、これが人外バトルｉｎ元俺の部屋に発展することになろうとは。
キンジｓｉｄｅ　ｅｎｄ
＊
当人の一人である藤島はというと
「依頼を怠慢してよくもぼくの前に顔を見せられたね、何か言い訳があるかい？　ナルミ」

もう一人の依頼主に正座をさせられていたのだった。

第九話　銃撃と拳撃（Shootings and fist attack）

如何でしたか？

いやはや定期更新を目指している割りには不定期でサーセン

それでは恒例でありたい次回予告

突如現れた今まで空気の侵略者（ゲソに非ず）
それに立ち向かう、元一般人　藤島鳴海
彼は凶暴極まりない侵略者に自らの新たな得物で立ち向かう

そして二人の戦いの果てにあるものとは？

次回　約束と要求

メオ「そういえば武偵さんのお友達　なんて呼べばいいんだろう？」
キンジ「テキトーに名前でいいぞ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6303w/

緋弾とニートと愚昧な武偵

2011年12月27日00時50分発行